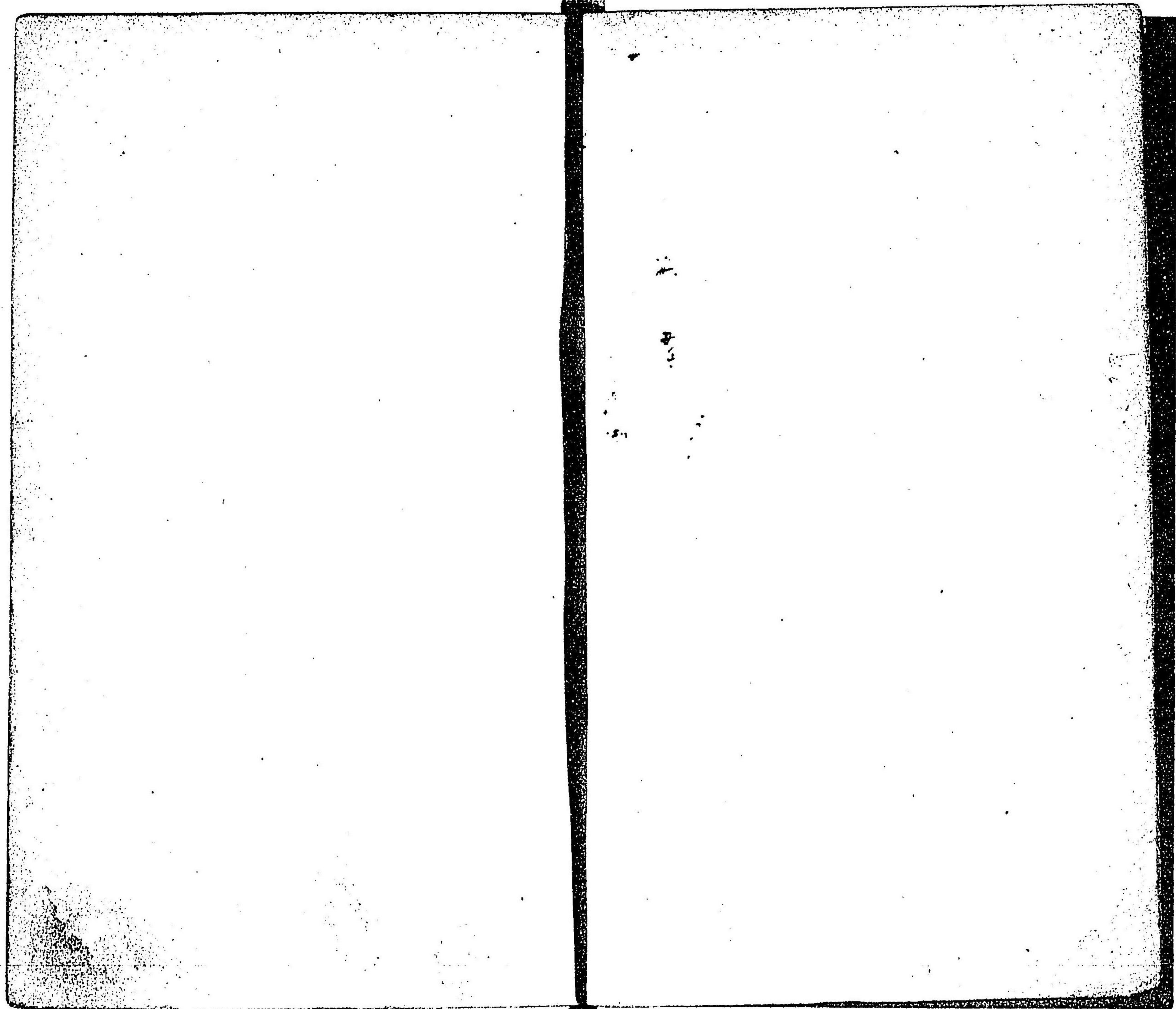


川 漢 鐵 路 鐵 道

地 理 學 概 論

全

大 學 同 志 會 藏 版



小林紫軒校訂

芭蕉妙文集

全

東京

文學同志會藏版

明治

38 1 8

丙亥

## 序

『うきわれを、淋しがらせよとうたひては、閑古鳥に羽袖をしほらせ。戀の心を、もたせばやと、かこちては、掛乞に笑顔をつくらす。唇寒き秋風に、遠くからふみを吹破り、古池の蛙、はるかに萬葉にさかのぼり。詞花言葉の自在、東南にかをり、西北にしげりて、意に四海正風一家の俳諧とぞなれりける。この道や、たれか慕はざらむ。この勞や、たれか謝せざらん。嗚呼詩なる哉、蕉翁の生涯』

文學同志會大月乘山氏、一大計畫を以て我邦一般の家庭に、健全にして多趣味なる文學的讀物を供給し。聽ては英のカッセル文庫、獨のレクラム叢書と對峙せんとの抱負あり。これが材

料の選擇と、开が校訂とを予に託せらる。予固より淺學、或は選擇の好適を缺く虞あらんも、氏が文界に忠實なる、それに賛同し、既に近松妙文集、西鶴妙文集、爲永妙文集、等版を重ね。今又俳星芭蕉の俳文に及ぶ。尙進んでは、各方面より材を選み版を重ね、以て發行者及讀者の満足を期待せんとす。若夫れ、美文の妙境に遊び、國文學の精髓を味ふべく、我が紳士淑女が娛樂に由つて讀書の嗜好を養ひ得ば、予の幸甚とするところなり。

芭蕉歿後二百十有一年、明治三十七年時雨會の日、鶯里庵に於て

校訂者識

内容

第一章 紀行	おくの細道……………一	貝おほひ序……………七七
	鹿島紀行……………二九	野河序……………七七
	更科紀行……………三二	織の松感歎……………七八
	野さらし紀行……………三五	虚題集跋……………七九
	笈之小文……………四四	伊勢紀行跋……………八一
		雙虫跋……………八一
第二章 日記 記文		
	雙眼日記……………五九	
	幻住庵記……………六九	
	十八樓記……………七二	
	伊賀國新大佛之記……………七三	
	紙衣之記……………七四	
	洒落堂記……………七五	
第三章 序 跋		
		芭蕉を移す辭……………八三
		柴門辭……………八四
		成秀が庭上の松をほめる詞……………八七
		竹原吟能別之詞……………八七
		既望賦……………八八
		月見賦……………九〇
		島之賦……………九二
第四章 辭 詞 賦		

第五章 讀傳頌誄

西行上人像讚	九五
雲骨白面像	九五
幸都婆小町贊	九六
伴折	九六
東頭傳	九七
石白頌	九八
嵐園誄	九九

第六章 說辨銘箴

燃掃之說	一〇一
閉關之說	一〇二
更科續拾月之辨	一〇三
相去之辨	一〇四
座右銘	一〇四
鑑之銘	一〇五
孤之銘	一〇六
自得箴	一〇六

第七章 雜種

須磨の浦	一〇九
贈酒堂	一〇九
贈風經子	一一〇
與政人文	一一〇
越後國能生留白山權現社沙路之名鐘	一一一
鎌の類	一一一
古池の鐘	一一二
那初秋七日雨景	一一三
中將實方之塚	一一五
雲磨明石	一一六
卷行二	一一七
河原すゞみ	一一七
羅の家	一一八
さじの山吹	一一八
落馬	一一九

第九章 俳諧有耶無耶關

序	一三九
十八鉢引手留草	一四〇
發句整頓非狂句在立樣之事	一四四
發句之正事	一四六
虛實正事	一四七
不易流行之事	一四七
發句五品之事	一四八
發句八鉢之事	一五〇
奉納傳三品	一五三
附合八鉢の事	一五八
附合八鉢の七名	一五九
附合八鉢の辨句	一六二
俳諧五花の目決	一六四
俳諧月之傳	一六七
七夕傳の事	一六八
月次の月の事	一六八
名所前後の事	一六九

第八章 書簡

あすなろ	一一九
伊勢	一二〇
小野	一二一
藤	一二一
藤造りの翁	一二二
行脚の徒	一二三
五	一二五
貞徳公守武の書簡	一二七
近江八景	一二八
餘	一二九
其角	一三一
木田様へ	一三二
正秀に答る文	一三四
去來様へ	一三六
水間道悅様へ	一三七
忠七様へ	一三八
松尾半左衛門様へ	一三八

木式表十句之章	一七〇	芭蕉庵桃奇傳	一八〇
第十章——芭蕉について		第十一章——芭蕉について(盤里述)	
季吟の巻	一七三	俳人芭蕉	一九七
芭蕉庵再興の動化文	一七三	芭蕉俳系	二一四
布施回向料	一七四	芭蕉年表	二一五
引草の語	一七五	芭蕉と著作	二一八
芭蕉の遺物	一七六	歴史的俳話	二二二
俳門の六哲	一七七	外人より見たる十七字詩	二二七
俳諧の五派	一七八	俳句と熟考	二三四
蕉門十哲	一七九		

内容

芭蕉妙文集

小林紫軒校訂

第一章——紀行

おくの細道

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也。船の上に生涯をうかへ、馬の口とらへて老をむかふる物は日々旅にして旅をすみかとする、古人も多く旅に死せるあり。予もいつれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊のちもひやます、海濱にさすらへ去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひてや、暮春立る霞の空に白川の關こえんと、そる神のものにつきて心をくらはせ道祖神のまねきにあひて取物手につかす。股引の破をつゝり笠の緒付かへて三里に灸すゆるより松島の月先心にかゝりて住る方は人に譲り杉風か別墅にうつる。

草の戸も住替る代を籬の家

面八句を麻の柱に懸置、彌生の末の七日、明ぼの、空朦々として月は有明にて光をさまれる物から、不二の峯かすかに見えて上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し。むつまじきかきりは宵よりつとひて船に乗て送る、千じゆといふ所にて船をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の泪をそぐ。

行春や鳥は啼魚の目は泪

是を矢立の初として行道なほす、まず。人々は途中に立ならびて後かげの見ゆる迄はと見送るなるべし。今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚只かりそめに思ひ立て吳天に白髪のうちらみを重ねといへ共、耳にふれていまだ目に見ぬさかひ若生て歸らばと、定なき頼みの末をかけ、其日漸草加といふ宿にたどり着にけり。瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむ、只身すがらにと出立侍るを紙子一衣は夜の防ぎ浴かた雨具墨筆のたぐひ、あるはさがたきはなむけなどしたるはさすがに打捨がたくて路次の煩となれるこそわりなけれ。

室の八島に詣づ。同行會良が曰、此神は木の花さくや姫の神と申て、富士一體也、無戸室に入て焼玉ふちかひのみ中に火々出見尊生れ玉ひしより、室の八島と申、又煙を讀習し侍るもこの謂也、はたこのしろといふ魚を禁ず、縁起の旨世に傳ふ事も侍し。

卅日、日光山の麓に泊る、あるじの云けるやう、我名を佛五左衛門と云、萬正直を旨とする故に人かくは申侍る、まゝ一夜の草の枕も打解けて休み玉へと云、いかなる佛の濁世塵上に再現してかゝる桑門の乞食順禮ごとき人をたすけ玉ふにやと、あるじのなすことに心をとめてみるに、唯無智無分別にして正直偏固の者也、剛毅木訥仁に近きたぐひ氣稟の清質尤尊ふべし。

卯月朔日、御山に詣拜す、往昔此御山を二荒山と書しを空海大師開基のとき、日光と改玉ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今此御光一天にかゝりやきて恩澤八荒にあふれ、四民安堵のすみか穩かなり、猶憚多くて筆を擱さぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光り

黒髪山は霞かゝりて雪いまだ白し。

剃捨て黒髪山に衣かへ

會良

會良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉軒をならへて、予が薪水の勞をたすく。



このたび松しま象潟の眺共にせんことを悦び、且は禰旅の難をいたはらんと旅立曉髪を剃て墨染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす、仍て黒髪山の句有、衣更の二字力ありてさこゆ。

廿餘丁山を登りて瀧有、岩洞の頂より飛流して百尺千岩の碧潭に落たり、岩窟に身をひそめて入て瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申傳へ侍るなり。

暫時は瀧にこもるや夏のはじめ

那須の黒はねと云所に知人あれば、是より野越にかゝりて直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行に雨降日暮る、農夫の家に一夜をかりて、明れば又野中を行、そこに野飼の馬あり、草刈るをのこなげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず、いかゞすべきや。されども此野は縦横にわかれてうね／＼しき旅人の道ふみたがへんあやしう侍れば、此馬のとまるところにて馬を返し玉へとかし侍ぬ。ちひさきもの馬の跡したひてはしる、獨は小姫にて名をかさねと云、聞なれぬ名のあやしかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし

頓て人里に至れば、あたひを鞍つほに結付て馬をかへしぬ。黒羽の館代淨法寺何がしの方に音信る、思ひがけぬあるじの悦び、日夜語つゞけて、其弟桃翠などいふが朝夕勤とふらひ自の家にも伴ひて親屬のかたにもまぬかれ、日をふるまゝにひとひ郊外に逍遙して犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふ。夫より八幡宮に詣、與市が扇の的を射し時、別しては我國氏神正八幡とちかひしも、此神社にて侍ると聞ば、感應殊にしきりに覺えらる。暮れば桃翠が家に歸る。

修驗光明寺と云有、そこにまねかれて行者堂をいはず。

夏山に足駄を拜む首途かな

當國雲岸寺のちくに佛頂和尚の山居の跡あり。

堅横の五尺にたらぬ草の庵

むすふもくやし雨なかりせは

と松に炭して岩に書付侍りと聞え玉ふ、其跡見んと雲岸寺に杖を曳けは、人々すゝんで共にいぢない、若き人多く道のほど打さわぎておほえず彼麓に至る。山はちくあるけしきに

て谷道遙に松杉黒く苔したりて、卯月の天今猶寒し、十景盡る所橋をわたつて山門に入、さてかの跡はいづくのほどにやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり、妙禪師の死關法雲法師の石室をみるがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立

とりあへぬ一句を柱に残し侍りし、是より殺生石に行く、館代より馬にておくらる、此口付のをとて短冊を得させよと乞ふ、やさしき事を望みはんべるものかなと、

野を横に馬率むけよほととぎす

殺生石は温泉のいづる山かげにあり、石の毒氣いまだほろびず。蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほどかさなり死す、又清水ながるゝの柳は蘆野の里にありて田の畔に残る、此所の郡守戸部某の此柳見せばやと折々にのたまひ聞え玉ふをいづくのほどにやと思ひしを今日此柳のかげにこそ立より侍りつれ、

田一枚植て立去る柳かな

心許なき日かず重なるまゝに白川の關にかゝりて旅心定りぬ、いかて都へと便り求めしも

斷りなり。中にも此關は三關の一にして、風騒の人心をととむ、秋風を耳に残し紅葉を俤にして青葉の梢なほあはれ也。卯の花の白妙に茨の花の咲をひて雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣装を改めし事など、清輔の筆にもととめちかれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな

曾 良

とかくして越行まゝにあぶくま川を渡る。左に會津根高く、右に岩城相馬三春の庄常陸下野の地をさかひて山つらなるかげ沼と云所を行くに今日は空曇て影うつらず、すか川の驛に等騎といふものを尋て四五日ととめらる。先白川の關いかにこまつるやと問ふ、長途のくるしみ、身心苦しく風景に魂うばれ懷舊に腸を斷ちてはかくしう思ひめぐらさず。

風流の初やちくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば、脇第三とつけて三巻となしぬ。

此の宿の傍に大きな栗の木蔭をたのみて世をいとふ僧有、椽拾ふ深山もかくやと間に覺えられてものに書付侍る其詞、

栗といふ文字は西の木と

書て西方淨土に便ありと

行基菩薩の一生杖にも柱

にも此木を用給ふとかや

世の人の見付ぬ花や軒の栗

等閑が宅を出て五里斗檜皮の宿を離れてあさか山有路より近し。此あたり沼多しかつみ刈頭もや、近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ふぞと人々に得侍れども、更に知る人なし。沼を尋ね人にとひかつみくと尋ねありきて、日は山の端にかゝりぬ。三本松より右にされて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。あくればしのぶ文字摺の石を尋て忍ぶの里に行、遙山陰の小里に石なかば土に埋てあり、里の童の來りて教ける、昔は此山の上に侍しを往來の人の麥草をあらして此石をこゝろみ侍をにくみて此谷へつき落せば、石の面下さまにふしたりと云、さもあるべき事や。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪のわれしを翹て瀬の上と云宿に出づ、佐藤の庄司が舊跡は左の山際一里半斗に有。

飯塚の里齋野と聞て尋ねく行に、丸山といふに大手の跡など尋あたる、是庄司が舊館也。人の教ふるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す、中にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれどもかひくしき名の世に聞えつる物かなと、袂をぬらしぬ。墮落の石碑も遠きにあらず、寺に入て茶を乞へば、爰に義經の太刀、辨慶笈をとめて什物とす。

笈も太刀も五月にかされ紙幟

五月朔日のこと也、其夜飯塚にやどる、温泉あれば湯に入て宿をかるに土坐に簾を敷てあやしき貧家なり。灯もなければあろりの火かげに寐所をまうけて臥す、夜に入て雷鳴雨しきりに降て臥る上よりも蚤蚊にさゝれて眠らず、持病さへちこりて消入斗になん。短夜の空もやうやう明れば、又旅立ぬ、猶夜の餘波心す、まず馬をかりて桑折の驛に出る。遙かなる行末をかへて斯る病覺束なしといへども、羈旅邊土の行脚捨身無常の觀念道路に死なん、是天の命なりと、氣力聊とり直し、路縦横に踏て伊達の大木戸をこす。鐵摺白石の城を過、笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくのほどならんと、人にとへば、是

より遙右に見ゆる山際の里をみのわ笠しまと云道祖神の社かたみの薄、今にありと教ふ。  
此頃の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺やりて過るに、笠輪笠島も  
五月雨の折にふれたりと、

笠島はいづこ五月のぬかり道

岩沼に宿る。

武隈の松にこそ目覺る心地はすれ、根は土際より二木にわかれて昔の姿うしなはずとしら  
る。先能因法師思ひ出つ、往古むつの守にて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせられ  
たる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠たり。代々あるは伐りあるは植繼など  
せしと聞に、今將に千歳のかたちと、のほひてめてたき松のけしきになん侍りし。

武隈の松見せ申せ遅さくち

擧 白

と云ふもの、餞別したりければ、

櫻より松は二木を三月越

名取川を渡りて仙臺に入、あやめふく日也、旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に畫工加右  
衛門と云ふものあり、聊心ある者と聞て知る人になる。この者年頃さだかならぬ名どころ  
を考置侍ればとて、一日案内す、宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらるゝ、玉田よ  
こ野つゝじが岡はあふひ咲ころ也。日影もしらぬ松の林に入て、爰を木の下と云とぞ、昔  
もかく露ふかければこそみさふらひみかさとはよみたれ。藥師堂天神の御社など拜みて、  
其日はくれぬ。猶松島鹽がまの所々畫に書て送る、且紺の染緒つけたる草鞋二足餞す、さ  
ればこそ風流のしれもの、爰に至りて其實を顯す。

あやめ草足にむすばん草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行は、あくの細道の山際に十符の菅あり、今も年々十符菅菰を  
調て國守に献ずとなり。

壺 碑

つぼの石ふみは高さ六尺餘横三尺斗歟、苔を穿て文字幽也。

四維國界之數里をしるす。此城は神龜元年按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所里也。天平  
寶字六年參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣猶修造而十二月朔日と有、聖武天皇の御時に

當れり。むかしよりよみ置ける歌枕多く語傳ふといへども、山崩れ川流れて道あらたまり、石は埋て土にかくれ木は老て若木にかはれば、時移り代變じて其跡たしかならぬ事のみを、爰に至て疑なき千歳の紀念、今眼前に古人の心を閱す、行脚の一徳存命の悦び、羈旅の勞をわすれて泪落るばかり也。

それより野田の玉川沖の石を尋ね、末の松山は寺を造て末の松山といふあひく皆墓はらにてはねをかはし枝をつらぬる契の末も終はかくのみと悲しさも増りて鹽がまの浦に入相のかねを聞、五月雨の空聊はれて夕月夜幽に籬が鳥とほど近し。蟹の小舟こぎつれて肴わかつ聲々につなでかなしもとよみけん、こゝろもしられていと哀也。其夜目盲法師の琵琶をならして奥淨るりと云ものをかたる、平家にもあらず舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて枕ちかうかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから殊勝に覺えらる。早朝鹽がまの明神に詣、國守再興せられて宮柱ふとしく彩椽さらひやかに石の階九仞に重り、朝日あけの玉がきをかきやかす、かゝる道の果塵土の境まで神靈あらたにましますこそ我國の風俗なれどいと貴けれ。神前に古き寶燈有、かねの戸びらに面に文治三年和泉三

郎寄進と有、五百年來の俤、今日の前にうかひてそゝろに珍らし、渠は勇義忠孝の士也、佳命今に至りてしたはずといふ事なし、誠人能道を勤め義を守るべし、名もまた是にしたがふと云へり。日既に午にちかし、船をかりて松島にわたる、其間二里餘、雄島の磯につく。

抑ことふりたれど、松島は扶桑一の好風にして凡洞庭西湖に耻ぢず。東南より海に入て江の中三里浙江の潮をたとふ島々の數をつくして歌つものは天を指ふすものは波に匍匐あるは二重にかさなり三重にたゝみて左にわかれ右につらなる、負るある抱けるあり兒孫を愛するがごとし。松の緑こまやかに枝葉汐風に吹たわめて、屈曲のづからためたるがごとし。其氣色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはやふる神のむかし。大山すみのなせるわざにや、造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきて海に出る島也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有。將松の木陰に世をいとふ人も稀に見え侍りて落穂松笠など打けふりたる草の庵閑に住なし、いかなる人とはしられすながら、まづなつかしく立寄ほどに月海にうつりて晝のながめ又あらたむ。江

上に歸りて宿を求めば、窓をひらき二階を作りて風雲の中に旅寐するこそあやしきまで妙なる心ちはせらるれ。

一四

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

曾 良

予は口をとどて眠らんとしていねられず、舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり、原安適松かうらしまの和歌を贈らる、袋を解てこよひの友とす、且杉風濁子が發句あり。

十一日、瑞岩寺に詣、當寺三十二世の昔眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。其後雲居禪師の徳化に依て七堂葺改りて金壁莊嚴光を輝、佛土成就の大伽藍とはなれりけり、彼見佛聖の寺はいつくにやとしたはる。

十二日、平和泉と心さしあねはの松絹たへの橋など聞傳えて入跡稀に雉兔藪蕪の往かふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて石の巻といふ湊に出、こかね花咲とよみて奉たる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につとひ人家地をあらそひて窓の煙立つゝけたり。思ひかけず斯る所にも來れる哉と、宿からんとすれど更に宿かす人なし、漸まとしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道まとい行袖のわたり尾ふちの牧まのゝ萱はらなどよ

そめに見て遙なる堤を行心細き長沼にそふて戸伊摩といふところに一宿して平泉に至る、其間廿餘里程とよほゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有、秀衡が跡は田野に成て金雞山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川、南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入、康衡等が舊跡は衣ヶ關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせくと見えたり。偕も義臣すくつて此城にこもり功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものともか夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛哉

曾 良

兼て耳驚かしたる二堂開帳す、經堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散らせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既に頽廢空虚の叢と成へきを、四面新に圍て葺を覆て風雨を凌ぐ、暫時千歳の紀念とはなれり。

五月雨のふり残してや光堂

南部道遙にみやりて岩手の里に泊る、小黑崎みつの小島を過てなるこの湯より尿前しとまへの關にかゝりて出羽の國に越んとす。此道旅人稀なる所なれば關守にあやしめられて漸にして關をこす、大山にのぼつて日既に暮ければ封人の家を見かけて舍をもとむ、三日風雨あれてよしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿しとするまくらもと

あるしの云、是より出羽の國に大山を隔て道さだかならざれば道しるべの人を頼て越べきよしを申さらはと云て人を頼侍れば究竟の若者反脇指をよこたへ檜の杖を携へて我々が先に立て行、けふこそ必あやうきめにもあふべき日なれと辛き思ひをなして後について行、あるじの言にたがはず高山森々として一鳥の聲きかず、木の下闇茂りあいて夜る行がごとし。雲端につちふる心地して篠の中踏分く水をわたり岩に躓て肌につめたき汗を流して、最上の庄に出つ、かの案内せしをこの云やう、此道必不用の事有、恙なうふくりまゐらせて仕合せしたりとよろこびてわかれぬ、跡に聞てさへ胸とどろくのみなり。

尾花澤にて清風と云者を尋ぬ、かれは富るものなれども志いやしからず、都にも折々かよひて流石に旅に情をも知たれば日比とめて長途のいたはりさまくにもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまるなり

道出よかひやが下の蟻あまの聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがたかな

曾 良

山形領に立石寺と云山寺あり、慈覺大師の開基にて殊に清閑の地也、一見すべきよし人々のすゝむるによりて尾花澤よりとつてかへし、其間七里斗也、日いまた暮す。麓の坊に宿かり置て山上の堂にのぼる、岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊土石老て苔滑に岩上の院々扉を閉て物音さこへず、岩をめぐり岩を這て佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行のみおほゆ。

閑かさや岩にしみ入蟬の聲

最上川のぼらんと大石田と云所に日和を待、爰に古き俳諧の種こぼれて忘れぬ花のむかしをしたひ蘆角一聲の心をやわらけ此道にさくり足して新古ふた道にふみまよふといへども、

みちしるべする人しなればと、わりなき一卷残しぬ、このたびの風流爰に至れり。

最上川はみちのくより出て山形を水上とす、こてんはやふさなど云ふそろしき難所あり。板敷山の北を流て果は酒田の海に入、左右山覆ひ茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをやいな船とはいふならし、白糸の瀧は青葉の隙々に落て仙人掌岸に臨て立水みなさりて舟あやうし。

#### 五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黒山に登る。圖司左吉と云者を尋て別當代會覺阿闍利に謁す。南谷の別院にして、舎して憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日、本坊において俳諧興行。

#### 有かたや雪をかをらす南谷

五日、權現に詣、當山開關能除大師はいつれの代の人と云事をしらす、延喜式に羽州里山の神社と有、書寫黒の字を里山となせるにや、羽州里山を中畧して羽黒山と云にや、出羽といへるは鳥の毛羽を此國の貢に献すると風土記に待るとやらん、月山湯殿を合せて三山

とす、當寺武江東叡に感して天台止觀の月明らかに圓頓融通の法の灯かけをひて、僧坊棟をならへ、修驗行法を勵し、靈山靈地の險効人貴ひ且恐る繁榮長にしてめてたき御山と謂ふべし。

八日、月山にのぼる、木綿しめ身に引つけ寶冠に頭を包み強力と云ものに導ひかれて雲霧山氣の中に氷雪を踏てのぼる八里、更に日月行道の雲關に入かとあやしまれ、息たへ身こゝえて頂上に臻れば日没て月顯る、笹の鋪篠を枕として臥て明るを待。日出て雲消れば湯殿山に下る、谷の坊に鍛冶小屋と云有、此國の鍛冶靈水を撰て爰に潔齋して劍を打つ、終に月山と銘を切て世に賞せらる、彼龍泉に鍛へて淬すとかや、干將莫耶のむかしをしたふ道に堪能の執あさらぬ事しられたり。岩に腰をかけてしばしやすらふほどに、三尺ばかりなる櫻のつぼみ半ばひらけるあり、ふり積雪の下に埋て春を忘れぬ、遅さくらの花の心わりなし、炎天の梅花爰にかをるがごとし、行尊僧正の歌の哀も爰に思ひ出て猶まさりて覺ゆ、總て此山中の微細行者の法式として他言する事を禁ず、仍て筆をとめて記さす、坊に歸れば阿闍利の需に依て三山順禮の句々短冊に書。



涼しさやほの三日月の羽黒山

雲の峯幾つ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道の泪かな

會 良

羽黒山を立て鶴ヶ岡の城下長山氏重行と云物のふの家にはかへられて俳諧一卷有、左吉も共に送りぬ。川舟に乗て酒田の湊に下る、淵庵不玉と云醫師の許に宿す。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海にいれたり最上川

江山水陸の風光敷をつくして今象潟に方丈を責め、酒田の湊より東北の方山を越、磯を傳ひいさをふみて其際十里日影やゝかたぶく比、汐風眞砂を吹上げ雨朦朧として鳥海の山かくる、開中に莫作して雨も又奇也とせば雨後の晴色又頼もしと、蟹の宮屋に膝をいれて雨の晴るを待、其朝天能霽て朝日花やかにさし出る程に、象潟に舟をうかぶ。先能因島に舟を寄せて三年幽居の跡をとふらひ、むかふの岸に舟をあがれば花の上こくとよまれし櫻

の老木、西行法師の紀念をのこす。江上に御陵あり、神功皇宮の御墓といふ。寺を千満珠寺と云、此處に行幸ありし事いまだ聞す。いかなる事にや、此等の方丈に座して籠を捲けば風景一眼の中に盡て南に鳥海天をさへ其陰うつりて江にあり、西はむやゝの關路をかきり、東に堤を築て秋田に通ふ道遙に海北にかまへて浪打入る所を汐こしと云、江の縦横一里ばかり俤松島にかよひて又黒なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとく、寂しさに悲しみをくはへて地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねふの花

汐越や鶴はさぬれて海涼し

祭 禮

象潟や料理何くふ神まつり

蟹の家や戸板を敷て夕涼

岩上に雕鳩の巢を見る

波こえぬ契ありてやみさこの巢

會 良

みの國の商人 低

耳

會

良

酒田の餘波日を重て北海道の雪に望み、遙々のちも胸をいたましめて加賀の府まで百卅里と聞、鼠の關をこゆれば越後の地に歩行を改て、越中の國一ふりの關に到る、此間九日、暑濕の勞に神をなやまし病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似す

荒海や佐渡によこたふ天の川

今日は親しらずしらず犬もどり駒返しなど云北國一の難所を越てつかれ侍れば、枕引よせて寝たるに西の方に若き女の聲二人斗ときこゆ、年老たるをこの聲も交て物語するをさけば、越後國新潟と云所の遊女成し、伊勢參宮するとして此關迄をこの送りて、あすは古郷へかへす文したゝめてはかなき言傳などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかしあまの此世をあさましう下りて定なき契日々の業因いかにつたなしと物いふをさゝく寝て、あした旅立に我々にむかひて行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しく侍れば、見えかくれにも御跡をしたひ侍らん、衣の上の御情に大慈のめくみをたれて結縁せさせ玉へと泪を落す。不便の事には侍れども、我々は所々にてとまる方おほし、只人の行にまらし。

一家に遊女もねたり萩と月

會良にかたれば書とめ侍る、くろべ四十八ヶ瀬とかや、數しらぬ川をわたりて那古と云浦に出擔籠の藤浪は春ならずとも初秋の哀とふへきものをと人に尋れば、是より五里いそ傳ひしてむかふの山陰にいり、蟹の宮ふきかすかなれは蘆の一夜の宿かすものあるましといひ、おどされてかの國に入。

わせの香や分入右は有磯海

卯の花山くりからか谷をこえて、金澤は七月中の五日也。爰に大阪よりかよふ商人何某といふ者あり、それか旅宿を共にす、一笑と云ふものは此道にすける名のほのく聞えて世に知人も侍りしに、去年の冬早世したりとて其兄遺善を催すに、

塚も動け我泣聲は秋の風

ある草庵にいさなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

二四

途中吟

あか／＼と日は難面もあきの風

小松と云所にて

しほらしき名や小松ふく萩すゝき

此所太田の神社に詣、實盛が甲錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝朝臣より給はらせ給とかや。げにも平士のものにあらず目庇より吹返しまて菊から草のほりもの金をちりばめ龍頭に鍬形打たり、實盛討死の後、木曾義仲願書にそへて此社にこめられ侍しよし、樋口の次郎が使せし事どもまのあたり縁起にみえたり。

むさんやな甲の下のさり／＼す

山中の温泉に行ほど白根か巍跡に見なしてあゆむ、左の山際に観音堂あり、花山の法皇三十三所の順禮とけさせ玉ひて那谷と名付玉ふとや、那智谷組の二字をわから侍しとぞ、奇石さま／＼に古松植ならへて、萱ふきの小堂岩の上に造りかけて殊勝の土地也。

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す、其功有馬につぐと云。

山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ

あるじとする物は灸之助とて、小童也。かれが父俳諧を好み、浴の貞室若輩の(あ)ひして、爰に來りし此風雅に辱しめられて浴に歸りて貞徳の門人となつて世に知らる、功名の後、此一  
村判詞の科を請すと云、今更むかし語りとはなりぬ。

曾良は腹を病て伊勢の國長島と云所にゆかりあれば、先立て行に、

ゆき／＼てたふれ伏とも萩の原

曾

良

と書置きたり、行ものゝ悲しみ残るものゝうらみ隻鳥のわかれて雲にまよふが如し、予も  
又、

今日よりや書付消ん笠の露

大聖寺の城外、全昌寺といふ寺にとまる、猶加賀の地なり、曾良も前の夜此寺にとまりて、

終宵秋風聞やうらの山

二五

と残す、一夜の隔千里に同じ、吾も秋かせを聞て衆寮に臥せば、明ほの、空近う讀經の聲すむまゝに鐘板鳴て食堂に入、けふは越前國へと心早卒にして堂下に下るを、若き僧とも紙硯をかゝへ階のもとまで追來る、折ふし庭中の柳ちれば、

庭掃て出はや寺に散柳

とりあへぬさまして草鞋ながら書捨つ。

越前の境吉崎の入江を、舟に棹して汐越の松を尋ぬ。

終夜嵐に波をはこはせて

月をたれたる汐越の松

西 行

此一首にて數景盡たり、もし一辯を加るものは無用の指を立るがごとし。

九間天龍寺の長老、ふるき因あれば尋ぬ。又金澤の北枝と云もの、かりそめに見送りて此所までしたひ來る、所々の風景過ぎず思ひつゝけて折節あはれなる作意など聞ゆ。今既に別に望みて、

物書て扇引さく除波かな

五十丁山に入て永平寺を禮す、道元禪師の御寺也。邦機千里を避て、かゝる山陰に跡をのこし玉ふも貴きゆえあることゝや。

福井は三里斗なれば、夕飯したゝめて出るに、たそがれの路たとくし。爰に等裁といふ古き隠士有、いづれの年にか江戸に來りて手を尋ぬ、遙十とせ餘り也。いかに老さらほひて有にや、將死けるにやと、人に尋侍れば、いまに存命してそこくと教ふ、市中ひそかに引入て、あやしの小家に夕貌へちまのはひかゝりて鶏頭帯木に戸ほそをかくす、さては此うちにこそと門を叩は佗し氣なる女の出て、いづくよりわたり玉ふ道心の御坊にや、あるじは此あたり何がしと云ものゝ方に行きぬ、もし用あらば尋玉へと云、かれが妻なるべしと知らる、むかし物がたりにこそかゝる風情は侍れと、頓て尋逢てその家に二夜とまりて、名月はつるかのみなとにとたひ立つ、等裁も共にちくらんと裙をかしうかゝげて路の枝折とうかれ立、漸白根ヶ嶽かくれて比那ヶ島あらはるあさむつの橋をわたりて玉江の蘆は穂に出にけり、鶯の關を越て尾湯峠を越れば燧が城歸山に初雁を聞て十四日夕ぐれつるかの津に宿をもとむ、その夜月殊に晴たり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路の

ならひ猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜參す、仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて松の木の間にもり入たる、おまへの白砂霜を敷るがごとし。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈土石を荷ひ泥濘をかかせて參詣往來の煩なし、古例今にたへず、神前に眞砂を荷ひ玉ふ、これを遊行の砂持と申侍ると亭主かたりける。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず雨降。

名月や北國日和定なき

十六日、空霽たれば、ますほの小貝ひろはんと種の濱に舟を走す、海上七里あり、天屋何某と云もの破籠小竹筒などこまやかにしたゝめさせ僕あまた舟にとりかせて追風時のまに吹着ぬ、濱はわづかなる海士の小家にて住しき法花寺あり、爰に茶を飲酒をあたくめて夕ぐれのみさびしさ感に堪たり。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

浪の間や小貝にまじる萩の聲

其日のあらし等裁に筆をとらせて寺に残す。

路通も此みなど迄出むかへて、みのゝ國へと伴ふ。

駒にたすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合、越人も馬をとばせて如行か家に入り集る前川子荆口父子、其外したしき人々日夜とふらひて蘇生のものにあふが如し。且悦且いたはる、旅のものうさもいまだやまざるに、長月六日になれば伊勢の遷宮をがまんと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋そ

\* \* \* \* \*

### 鹿島紀行

洛の眞室須磨の浦の月見に行て、松かげや月は三五夜中納言、といひけん、狂夫のむかしもなつかしきまゝに此秋鹿島の山の月見んと思ひ立ことあり、伴ふ二人、ひとりには浪客の士、

ひとり水雲の僧々はからすのこくなる墨の衣に袋を袷に打かけ、出山の尊像を厨子にあかめ入てうしろに背負柱杖曳ならして無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩して出ぬ、今ひとり僧にもあらず俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうふりの鳥なき嶋にもわたりぬべくて門より船に乗て行徳といふ處にいたる。船をあがれば馬にもならず、細脛の力をためさんと歩行よりぞ行甲斐國より或人の得させたる檜木もてつくれる笠をもの／＼いたゞきよそひて八幡といふ里を過ればかまかひの原といふひろき野あり、秦甸の千里とかや。目もはるかに見わたさる、筑波山むかふに高く二峯ならびたり。かの唐土に双劍の峯ありと聞へしは廬山の一隅なり、雪は申さず先むらさきのつくはやま、と詠しは我が門人嵐雪が句也。すべて此山は日本武尊のことはをつたへて連歌する人のはじめにもなづけたり、和歌なくばあるべからず、句なくば過べからず、誠に愛すべき山の姿なりげらし。萩は錦を地にしけらんやうにて、爲仲の長櫃に折入て都のつとに持せたるも風流にくらからずさちかうをみなへしかるかや尾花みたれ合て。小男鹿の妻こふ聲いとあはれ也。野の駒所得かほにむれありく又哀れなり。日既に暮かゝる程に利根川のほとり下ふさといふ所

につく、此川にて鮭の網代といふものをたくみて武江の市にひさく者あり。宵のほど其漁家に入てやすらふ夜の宿腥し、月くまなく晴けるまゝに夜船さしくだして鹿島にいたる、晝より雨しきりに降て月見るべくもあらず。麓に根本寺のささの和尚、今は世をのがれて此所におはしけるといふを聞て、尋入てふしぬすこぶる人をして深省を發せしむと吟じけん、しばらく清淨の心をうるに似たり。曉の空いさゝか晴ける、和尚ちこし驚かし玉ふれば、人々起出ぬ、月の光り雨の音たゞあはれなるけしきむねにみちていふべき言葉もなし。はる／＼と月見に來たる甲斐なきこそ、ほいなさわざなれど、かの何がしの女すら時鳥の歌得よまでかへりわづらひしも、我ためにはよき荷擔の人ならんかし。

月はやし梢は雨をもちながら

寺に寐てまこと顔なる月見かな

雨に寐て竹あきかへる月見かな

をり／＼にかはらぬ空の月かげも

ちゝのながめは雲のまに／＼

曾 良

和 尚

### 更科紀行

三三

さらしなの里をばすて月見ん事しきりにすゝむる秋風の心に吹さわぎて、ともに風雲の情をくるはすもの又一人越人と云ふ。木曾路は山深く道さかしく、旅寐の力も心もとなしと、荷兮子か奴僕をしておくらす。おの／＼志つくすといへども驛旅の事心得ぬさまにて共におぼつかなくものごとしのどろにあとさきなるも中々にをかしき事のみ多し。何々といふ所にて六十斗の道心の僧おもしろげもなくをかしげもあらず、たゞむつ／＼としたるが腰たわむまで物おひ息はせわしく足はさざむやうにあゆみ來れるを、ともないける人のあはれかりておの／＼肩にかけたるもの共かの僧のおひぬものとひとつにからみて馬に付て、我をその上にのす。高山奇峯頭の上におほひ重りて左は大河なかれ岸下の千尋の思ひをなし、尺地もたひらかならざれば、鞍の上静ならず、只あやうき頬のみやむ時なし。棧はし寐覺なと過て、猿か馬場たち、峠などは四十八曲りとかや、九折重りて雲路にたどる心地せらる。歩行より行ものさへ眼くるめきたましひしほみて足さたまらざりけるに、かのつ

れたる奴僕いともおそる／＼けしき見えず、馬のうへにて只ねふりて落ぬべきことあまた、びなりけるを、あとより見あげてあやうき事のかぎりなし。佛の御心に衆生の浮世を見玉ふもかゝる事にやと、無常迅速のいそがはしさも、我身にかへり見られて、阿波の鳴戸は波風もなかりけり。夜は草の枕を求め、盡の思ひまうけたるけしきむすび捨たる發句など、矢立引出て燈の下に目をとち頭をたゝきてうめき伏せば、かの道心の坊旅懐の心ろして物思ひするにやと推量し、我をなぐさめんとす。わかき時をかみめぐりたる地あみだのたふとさ敷をつくし、おのがあやしとおもひし事共はなしつゝくるぞ風情のさはりとなりて、何を云出る事もせず。とてもまされたる月風の、壁の破れより木の間かくれにさし入て、引板の音鹿おふ聲所／＼にきこへける。まことにかなしき秋の心、爰に盡せり。いでや月のあるしに酒振まはんといへば、さかづき持出たり、よのつねに一めぐりもおほきに見えて、ふつ／＼かなる蒔繪をしたり。都の人はかゝるものは風情なしとて手にもふれざりけるに、おもひもかけぬ輿に入て、瑠璃玉唇の心地せらるゝも所から也。

あの中に蒔繪かきたし宿の月

三三

棧はしやいのちをからむつたかつら  
棧はしや先おもひいつ駒むかへ  
霧晴て棧はめもふさかれす

越人

姥捨山

俤や姨ひとりなく月のとも  
いさよひもまたさらしなの郡哉  
ひよろくと尙露けしや女郎花  
身にしみて大根からし秋の風  
木曾の椽うき世の人のみやけ哉  
送られて別れつ果は木曾の秋

善光寺

月影や四門四宗も只一つ  
吹とはす石はあさまの野分哉

さらしなや三よさの月見雲もなし

越人

\* \* \* \* \*

野さらし紀行

千里に旅立て路糧をつままず、三更月下無何に入るといひけん、昔の人の杖にすがりて貞  
享甲子秋八月、江上の破屋を立いづる程風の聲をよる寒氣なり、

野さらしを心に風のしむ身かな

秋十とせ却りて江戸をさす故郷

關越る日は雨降て山みな隠れたり、

霧しぐれ富士を見ぬ日そ面白き

何某千里といひけるは此度路の助と成て萬いたはり心をつくし侍る、常に莫逆の交り深く  
朋友に信ある哉此人。

深川や芭蕉を富士に預け行

千里



馬上の險

三六

道のへの木槿は馬にくはれけり

富士川の邊に三ツばかりなる捨子の哀れに泣あり、此川の早瀬にかけて浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨置けん小萩かもの秋の風、今宵やちるらん明日やしをれんと袂より喰ものなげて通るに、

猿を聞人すて子に秋の風いかに

いかにそや汝父にくまれたるか母にうとまれたるか、父は汝を悪むにあらし母は汝をうとむにあらじ、只是天にして汝が性のつたなきをなけ。

大井川越る日は終日雨降りければ、

秋の日の雨江戸にゆび折らん大井川

千里

二十日あまりの月かすかに見へて山の根際いとくらきに、馬上に鞭をたれて數里いまだ鶏明ならず。杜牧か早行の殘夢、小夜の中山に至りてたちまち驚く、

馬に寐て殘夢月遠し茶のけむり

松葉屋風瀑が伊勢に有けるを尋ね、音信て十日ばかり足をととむ。腰間に寸鐵を帯ひず襟に一瓩をかけて手に十八の珠を携ふ、僧に似て塵あり俗に似て髪なし、我僧にあらすといへども髪なきものは浮屠の屬にたくへて神前に入ることをゆるさず。暮て外宮に詣侍りけるに一の鳥居の陰ほのくらく、御燈處々に見えてまた上もなき峯の松風身にしむばかり深き心を起して、

三十日月なし千とせの杉を抱くあらし

西行谷の麓に流あり、女共の芋洗ふを見るに、

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

其日のかへるさ、或茶店に立寄けるに、てふといひける女あか名に發句せよと云て白ら絹出しけるに書付侍る、

蘭の香や蝶の翅にたきものす

閑人の茅舎をとひて、

蔦植て竹四五本のあらしかな

三七

長月の初、古郷に歸りぬ。北堂の萱草も霜枯果て、今は跡だになし、何事も昔にかはりてはらからの鬢白く、眉皺寄て只命ありてとのみ言て詞はなきに、兄の守袋ほときて母の白髮拜めよ、浦島が玉手箱汝が眉もや、老たりと暫く泣て、

手にとらば消ん泪そあつさ秋の霜

大和國に行脚して葛城郡竹の内といふ所にいたる、此所は彼の千里か舊里なれば日頃とまりて足を休む藪より奥に家あり、

綿弓や琵琶に慰む竹の奥

二上山當麻寺に詣て庭上の松を見るに凡千とせもへたるならん大さ牛をかくすともいふへけん、かれ非情といへども佛縁にひかれて斧斤の罪をまぬかれたるを幸にしてたふとし、

僧あさがほいく死にかへる法の松

獨よしの、奥にたどりけるに、誠に山深く白雲巖にかさなり、烟雨谷を埋んで山賤の家處々にちひさく西に木を伐る音、東に響き、院々の鐘の聲心の底に答ふ。昔より此山に入て世をわすれたる人の多くは詩にのかれ歌にかくる、いてや唐土の盧山といはんも亦むべな

らずや、或坊に一夜をかりて、

礎打て我にきかすや坊が妻

西上人の草の庵の跡は奥の院より右の方二丁許分け入程、柴人の通ふ道のみ僅に有てさかしき谷を隔てたるいと尊し、彼とくくくの水はむかしにかはらずと見えて今もとくくと雫落る、

露とくくくこゝろみに浮世すゝがばや

若是扶桑に伯夷あらばかならず口をすゝがん、もしこれ許由に告は耳をあらはん。山に登り坂を下るに秋の日既に斜になれば名ある所々見残して先づ、後醍醐帝の御陵を拜む、

御廟年を経てしのぶは何をしのぶ草

大和より山城を経て近江路に入て美濃に至るに、今須山中を過ていにしへ常盤の墳あり。伊勢の守武がいひける義朝殿に似たる秋の風とはいづれの處かにたりけん、我もまた、

義朝のこゝろに似たり秋の風

不破

四〇

秋風や藪もはたけも不破の關

大垣に泊りける夜は木因が家があるじとす、武藏野を出し時、野さらしを心に思ひて旅立ければ、

死にもせぬ旅寐の果よ秋のくれ

桑名本堂寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

草の枕に寐あきてまたほのくらさ中に濱のかたく出て、

雪うすし白うを白き事一寸

熱田に詣つ

社頭大いに破れ築地は倒れて草村に隠れかしこに繩とはりて小社の跡をしるし、爰に石をすゑて其神の名のる、蓬しのぶ心のまゝに生たるぞなか／＼に目出度よりもこゝろと／＼まゝりける、

しのぶさへ枯れて餅かふやとり哉

名護屋に入る道の程諷吟す、

狂句風の身は竹齊に似たる哉

草まくら犬もしくるゝか夜の聲

雪見にありきて、

市人において是うらん雪の

旅人を見て、

馬をさへなかむる雪のあした哉

海邊に日暮して、

海くれて鴨の聲ほのかに白し

爰にわらじをとき、かしこに杖を捨て旅寐ながらに年の暮ければ、

としくれぬ笠着て草鞋はきながら

としひくも山家にとしを越て、

誰か婿ぞ齒朶に餅ぢふ牛の年  
奈良に出る道のほど、

春なれや名もなき山の朝かすみ  
二月堂に籠りて、

水取りやこもりの僧のくつのおと  
京に登りて三井秋風が鳴瀧の山家をとふ、

梅 林

梅白しきのふや鶴をぬすまれし  
榿の木の花にかまはぬすがた哉  
伏見西岸寺任口上人に逢ふて、

我衣にふしみの桃のしづくせよ  
大津に出る山路を越て、

山路来て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望

辛崎の松は花よりおぼろにて  
壺の休らひとて旅店に腰をかけて、

躑躅生てその陰に干鯛さく女

吟 行

菜島に花見顔なる雀かな  
水口にて二十年を経て故人にあふ、

命ふたつ中に活たるさくらかな

伊豆の國蛭ヶ小島の桑門、是も去年の秋より行脚しけるに、我名を聞て草の枕の道連にも  
と、尾張の國より跡をしたひ來りければ、

いさともに穂麥くらはん草枕

此僧われに告て曰、圓覺寺大頓和尚ことし睦月のはじめ遷化したまふよし、まことや夢こ  
ちせらるゝに、先つ道より其角がもとへ申つかはしける、

梅戀て卯の花拜む泪かな

贈杜國子

白芥子にはねもく蝶の形見哉

二たび桐葉子かもとに有て、今やあづまに下らんとするに、

牡丹葉深く分け出る蜂の名残哉

甲斐の山家に立よりて、

ゆく駒の麥になぐさむやとり哉

卯月の末、庵にかへりて旅のつかれをはらすとて、

夏衣いまだ風をとりつくさず

\* \* \* \* \*

### 笈之小文

百骸九竅の中に物あり、かりに名つけて風羅坊といふ。誠にうすものゝ風に破れやすから

ん事をいふにやあらん、狂句を好む事久、終に生涯のはかりことゝなす。或時は倦て放擲せん事を思ひ、ある時はすゝむて人にかたん事をほこり、是非胸中にたゝかふて是か爲に身安からず。しばらく身を立む事をねがへども、これが爲にさへられ暫學て恐を曉事をおもへとも、是が爲に破られ、終に無能無藝にして只此一筋に繋かる、西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休の茶における、其貫通する物は一なり、しかも風雅におけるもの造化にしたかひて四時を友とす、見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし、像花にあらざる時は夷狄にひとし、心月にあらざる時は鳥獸に類す、夷狄を出、鳥獸を離れて造化にしたかひ造化にかへれとなり、神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我名呼れんはつしぐれ

又山茶花をやとくにして

岩城の住長太郎と云もの此脇を付て其角亭において關送りせんともてなす、

時は冬よし野をこめん旅のつと

此句は露沾公より下し侍りけるをはなむけの初として、舊友親疎門人等、あるは詩歌文章もて訪ひ、或は草鞋の料を包て志を見すかの三月の糧を集に力を入れず、紙布綿子などいふもの帽子したうつもの心々に送りつとひて霜雪の寒苦をいとふに心なし。あるは小船をうかへ別墅にまうけし草庵に酒肴携來りて行へを祝名残ををしみなとすることゆゑある人の首途するにも似たりと物めかしく覺えられけれ。

抑道の日記といふものは紀氏、長明、阿佛の尼の文をふるひ情を盡して餘は皆倂似かよひて其糟粕を改る事あたはず、まして淺智短才の筆に及ふへくもあらず、其日は雨降晝より晴てそこに松有、かして何と云川流れたりなといふ事たれくもいふべく覺え侍れども黄歌蘇新のたぐひにあらずは云事なかれ、されともその所々の風景心に残り、山館野亭のくるしき愁も、且ははなしの種となり、風雲の便ともおもひなしてわすれぬ所く跡や先と書集侍るを猶醉る者の猛語にひとしく、いぬる人の謔言するたぐひに見なして人又亡聽せよ。

鳴海にとまりて

星崎の闇を見よとや啼千鳥

飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ給ひて、都も遠くなるみかた、はるけき海を中にへたて、と詠し給ひけるを、自らかゝせ玉ひてたまはりけるよしかたるに、

京まではまた半空や雪の雲

三河國保美といふ所に杜國が忍ひて在けるをとふらはんと、先、越人に消息して鳴海より跡さまに二十五里尋かへりて、其夜吉田に泊る、

寒けれと二人寐る夜を頼もしき

あまつ繩手田の中に細道ありて、海より吹上る風いと寒き所なり、

冬の日や馬上に氷る影法師

保美より伊良古崎へ一里はかりも有へし、三河國の地つゝさにて、伊勢とは海をへだてたる所あれども、いかなる故にや、萬葉集には伊勢の名所の内に撰入られたり。此洲崎にて碁石拾ふ、世にいらら白といふとかや、骨山といふは鷹を打所なり、南の海のはてにて鷹のはしめて渡る所といへり、いらら鷹なと歌にもよめけりともへは猶あはれなる折ふし、

鷹一つ見付てうれしいらら崎

熱田御修葺

四八

ときなをす鏡も清し雪の花  
蓬左の人々にむかひとられて、しはらく休息するほと。

箱根こす人もあるらし今朝の雪

有人の會

ためつけて雪見にまがる紙子哉

いよゝらは雪見にころぶ處まで

香を探る梅に花見る軒端哉

此間美濃大垣岐阜のすきものとぶらひ來りて歌仙あるは一折など度々に及び、師走十日あ  
まり名護屋を出て舊里に入らんとす、

旅寝して見しやうき世の煤拂

桑名よりくはて來ぬれはと云日永の里より馬かりて杖つき坂上るほと荷鞍うちかへりて馬  
より落ぬ、

歩行あらは杖突坂を落馬哉

と物うさのあまり云出侍れども、終に季のことは入らず、

舊里や臍の緒に泣としの暮

宵のとし空の名残をしまんと酒のみ夜ふかして、元日寝わすれたれば、

二日にもぬかりはせしな花の春

初春

春立てまた九日の野山かな

枯芝ややゝかけるふの一二寸

伊賀國阿波庄といふ所に俊乗上人の舊跡あり、護峰山新大佛寺とかや云、名はかりは千歳の  
形見となりて、伽藍は破れて礎を殘し、坊舎は絶て田畑と名の替り、丈六の尊像は苔の縁  
に埋て、御くしのみ現前とをかまれさせ玉ふに、聖人の御影はいまた全くおはしまし侍る  
ぞ、其代の名残うたかふ所なく、泪こぼるゝはかり也。石の蓮臺、獅子の座などは蓮葎の  
上に堆く、双林の枯たる跡もまのあたりにてこと覺へられけれ。

丈六にかけろふ高し石の上  
さまくの事もひ出す櫻哉

伊勢山田

何の木の花とはまらず匂ひかな  
裸にはまた衣更着のあらし哉

菩提山

此山のかなしさを告よ野老堀

龍尙舎

物の名を先問ふ蘆の若葉哉

網代民部雪堂に會

梅の木に猶やとり木やうめの花

神垣の内に梅一本もなし、いかに故有事にやと神司などに尋侍れば、只何とはなしものづから梅一もともなくて子良の館の後に一もと侍るよしかたりつたふ。

御子良子の一もとゆかし梅の花

神垣やあもひもかけず涅槃像

彌生半過る程をうろにうき立心の花の我を道引枝折となりて、よしのゝ花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にてちきり置し人の、伊勢にて出むかひともに旅寢のあはれを見、且は我爲に童子となりて道の便りにもならん自ら萬菊丸と名をいふ、まことにわらへらしき名のさまいと興あり、いてや門出のたはれ事せんと、笠のうちに落書す。

乾坤無住同行二人

よしのにて櫻見せうそ檜木笠

よしのにて我も見せうそ檜木笠

萬

丸

旅の具多きは道のさほりなりと、物皆拂捨たれども、夜の料にとかみこ一つ合羽やうの物、硯筆紙薬等笥筒なんと物に包みて後ろに背負ひたれはいとすねよわく、力なき身の跡さまにひかふるやうにて道猶すまらず、たゞ物うき事のみ多し。

草臥て宿かる頃やふじのはな



初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅  
足駄はく僧も見へけり花の雪

葛城山

猶見たし花に明行神の顔

三輪 多武峯 臍峠

雲雀より空にやすらう峠かな

龍門

龍門の花や上戸の土産にせん  
酒のみに語らんかゝる瀧の花

西河

ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音

蜻蛉か瀧

布留の瀧は布留の宮より二十五丁山の奥也

津田布引の瀧 巖田川の川上あり

大和箕面の瀧 巖尾寺へ臨む道にあり

櫻

さくらかりきとくや日々に五里三里

日は花に暮てさひしやあすならふ

扇にて酒くむかけやちるさくら

岩清水

春雨のこしたにつたふ清水かな

よしの、花に三日とまりて、曙黄昏のけしきにむかひ、有明の月の哀れなるさまなど心にせまり、胸にみちて、あるは攝政公のなかめにうははれ、西行の枝折にまよひ、かの貞室か是は／＼と打なくりたるに、我はいはん言葉もなく、いたづらに口をとちたるいと口をし、思ひ立たる風流いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり。

ちかはのまきりにこひし雉子の聲

ちる花にたぶさはつかし奥の院

萬菊

和歌浦

行春に和歌の浦にて追つきたり

跪はやふれて西行にひとしく、天龍の渡しをおもひ馬をかる時はいきまさし聖の事心にうかふ。山野海濱の美景に造化の功を見、或は無依の道者の跡をまたひ、風流の人の實をうかふ、猶栖をさりて器物のねかいなし、空手なれば途中の愁ひもなし、寛歩駕にかへ晚食肉よりも甘し、とまるへき道にかきりなく立へき朝に時なし、只一日のねかひ二つのみ、今宵能き宿とらん草鞋のわか足によろしきを求めんと斗はいさゝかのおもひなり、時々を氣を轉し日々に情をあらたむ、もしわづかに風雅ある人に出合たる悦限りなし、日比は古めかしくかたくなりと悪くみ捨たる人も邊土の道つれにかたりあひはにふやくらのうちに見出したるなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中に金を得たる心ちして、物にも書付、人に

もかたらんとおもふぞ、又是旅のひとつなりかし。

更衣

一つぬいて後に負ぬ衣かへ

吉野出て市子賣たし衣更

萬菊

灌佛の日は奈良にて、爰かしこに詣侍るに、鹿の子を産を見て、此日においてをかしければ、

灌佛の日に生れあふ鹿の子哉

招提寺鑑真和尚來朝の時、船中七十餘度の難をしのぎ給ひ、御目の内鹽風吹入て終に御目盲させ給ふ尊像をはいして、

若葉して御目の雫ぬくは、や

舊友に奈良にてわかる

鹿の角先づ一節のわかれかな

大坂にてある人のもとにて

杜若語るも旅のひとつかな

須磨

月はあれど留守のやう也須磨の夏

月見ても物たらはよや須磨の夏

卯月中比の空も腕に残りてはかなきみじか夜の月もいと艶なるに、山は若葉にくろみか  
かりて、ほととぎす鳴出べきまのゝめも、海のかたよりきらみそめたるに上野とおぼしき  
所は麥の穂波あからみあひて漁人の軒ちかき芥子の花たえくに見渡さる。

海士の顔先見らるゝやけしの花

東須磨西須磨濱すまと三處に別れてあながちに何わさするとも見へず、藻鹽たれつゝなど  
歌にもさこえ侍るも、いまはかゝるわさするなとも見えず、キヌコといふ魚を網して真砂  
の上ほしちらしけるを、からすの飛來てつかみ去る、是をにくみて弓をもてあつすを海  
士の業とも見えず、若し古戰場の名残をとめてかゝる事をなすにやと、いと罪ふかく、  
猶むかしの戀しさまゝにてつかひが案にのぼらんとする導きする子のくるしかりて、とか

くいひまぎらはすぞ、さまぐにすかして麓の茶店にて物くらはずべきなど云てわりなき  
體に見えたり、かれは十六と云けん里の童子よりは四ツばかりもおとうとなるべきを、數  
百丈の先達として羊腸險阻の岩根をほひのぼれば、すべり落ぬべき事あまた度なりけるを、  
つゝじ根笹とり付息をさらし汗をひたして漸雲門に入にぞ心もとなき導師の力なりけらし。

須磨の海士の矢先に啼や時鳥

ほととぎす消行方や嶋ひとつ

須磨寺や額ぬ笛さく木下闇

あかし夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる所の秋なりけりとかや、此浦の實は秋をむねとするなるべし、かなしさゝびしさい  
はん方なく、秋なりせばいさゝか心のはしをもいひ出べき物と思ふぞ、我心匠の拙さを  
しらぬに似たり、淡路島手にとるやうに見えて、すまあかしの海左右にわかる、吳楚東南  
の詠もかゝる所にや、物しれる人の見侍らはさまぐの境にもおもひなぞらうべし。又後

ろの方に山を経て、田井の畑といふ所、松風村雨のふる里といへり、尾土つゞき丹波路へ  
 かよふ道あり、鉢伏のぞき逆落しなどおそろしき名のみ残りて、鐘懸松より見下すに、一  
 の谷内裏やしき目の下に見ゆ、其代のみたれ、其時のさわぎ、さながら心にうかび佛につ  
 とひて二位のあま君、皇子を抱奉り、女院の御裳に御足もたれ、船やかたまるび入らせ玉  
 ふ御有さま、内侍局女孀曹子のたぐひさまくの御調度もてあつかひ、琵琶なんとしとね  
 ふとんにくるみて船中に投入供御はこぼれてうろくつの餌となり、櫛笥はみだれてあまの  
 捨草となりつゝ、千歳のかなしび、此浦にとまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや。

櫻見に好色五人女かな 齋里  
 船長の廓ばなしや春の海 同  
 色島や戀の目黒の比翼塚 同  
 山吹の雨静なり暮の鐘 同

第二章 日記 記 文

嵯峨日記

元祿四辛未卯月十八日嵯峨に遊びて去來が落柿舎に至る、凡兆共に來りて暮に及て歸る、  
 予は尙暫ととむべきよしにて障子つゝくり葎引かなくなり、舎中の片隅一間なる所を伏所と  
 さだむ。

- 机一ツ 硯 文庫 白氏文集
- 本朝一人一首 世繼物がたり
- 源氏物語 土佐日記
- 松葉集を置

唐の蒔繪書たる五重の器にさまざまの菓子を盛り、名酒一壺盃をへたり  
 夜の袞調菜の物共京より持來て貧しからず、我貧賤を忘れて清閑を樂む  
 十九日午半臨川寺に詣

大井川前に流て嵐山右に高く松の尾の里についけり、虚空藏に詣る人往かひ多し、松の尾の林の中に小督屋敷と云有、都て上下の嵯峨に三所あり、何れかたしかならん、彼仲國が駒とめたる所とて駒留の橋と云が此あたりに侍れば、暫く是によるべきにや。墓は三間屋の隣藪の内に有、まるしに櫻を植たり、かしこくも綿繡綾羅の上に起臥して終に藪中の塵芥となれり、昭君村の柳、巫女廟の花のむかし思ひやらる。

うきふしや竹の子となる人の果

嵐山藪の茂りや風の筋

斜日に及て落柿舎に歸る、凡兆京より來る、去來京より歸る、宵より臥。

廿日北嵯峨の祭見んと羽紅尼來る、去來途中の吟とて語る。

つかみあふ子供の長や麥畑

落柿舎は昔の主の作れるまゝにして處々頽破す、中々に作りみが、れたる昔のさまより、今のあはれなるさまこそ心とまるれ、彫せし梁畫る壁も風に破れ雨にぬれて奇石怪松も葎の下にかくれたる竹椽の前の柚の木一本花芳しければ、

柚の花にむかし忍ばん料理の間

子規大竹藪をものる月夜

またやみん覆盆子あからめ嵯峨の山

去來兄の方より菓子調菜の物など送りて、今宵は羽紅夫婦をとめて蚊屋一はりに五人こそり臥たれば、夜もいねがたくて、夜半過よりも各起出て、晝の菓子盆など取出て曉近きまではなし明す。去年の夏、凡兆が宅に臥たるに二疊の蚊屋に四ヶ國の人ふしたり、思ふ事よつにして夢もまた四種と書捨たる事どもなど云出して笑ひぬ。明れば羽紅凡兆京にかへる、去來尙とまる。

廿一日

昨夜いねさりければ心むづかしく、空のけしきもさのふに似ず、朝よりうち曇り雨をりく音信れば、終日眠臥たり。暮に及て去來京に歸る。今夜は人もなく、晝臥たれば夜も寐られぬまゝに幻住庵にて晝すてたる反古を尋出して慰に清書。

廿二日

朝の間雨降、今日人もなく淋敷まゝにむだ書して遊ぶ、其言。

喪に居る者は悲をあるじとし

酒をのむ者は閑をあるじとす

愁に住する者は愁をあるじとし

徒然に住する者は徒然を主とす

衰に住するものは衰を主とす

淋しさなくはうからましと西上人のよみ侍るは淋しさをあるじなるべし、又よめる。

山里にてはまた誰をよふこ鳥

獨すまんとおもひしものを

獨すむ程面白きはなし、長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば主は半日の閑を失ふと、素堂常に此言葉を憐む。予も又、

うき我を淋しからせよかんと鳥

とは有寺に獨居て云し句也。

暮方去來より消息す、乙州が武江より歸り侍るとて、朋友門人の消息ともあまた届く、其中曲水狀に予かすみすてし芭蕉の舊跡尋て宗波に逢よし、

むかし誰れ小鋤洗ひしすみれ草

又云

我すみ所弓柱二丈はかりにして楓一本外は青き色を見すと書て、

わか楓茶色になるも一盛り

嵐雪が文に

狗脊の塵にゑらるゝ厭哉

出替や幼ころにもものあはれ

廿三日

手を打は木魂に明る夏の月

夏の夜や木魂に明る下駄の音

竹の子や稚き時の繪のすさみ

麥の穂や涙に染てなくひはり  
一日く麥あからみてなくひはり  
能なしの眠たし我をさやうくし

廿四日

題落柿舎

豆植る畑も木部屋も名所かな  
暮に及て去來京より來る。

凡 兆

膳所昌房より消息。

大津尙白より消息有。

凡兆來る、堅田本願寺訪ふ、春伯凡兆京に歸る。

廿五日

千那大津に歸る。

史邦丈艸被訪。

丈 艸

題落柿舎

深對峨峰伴鳥魚就荒喜似野人居

枝頭今欠赤虬卵青葉々頭堪學書

尋小督墳

強攪怨情出深宮一輪秋月野村風

昔季僅得求琴韻何處孤墳竹樹中

芽出しより二葉に茂る柿の實

丈 艸

途中吟

杜宇あくや榎も梅さくら

史 邦

黃山谷の感句

杜門覓句陳無已 對客揮毫秦少游

乙州來て武江のはなし并爛五分はいかい一卷、其内に、

半俗の喬藥入はふところ

其角

臼井時を馬にかしこき  
腰の簀に狂はする月  
野分より流人に渡す小屋一ツ  
宇津の山女に夜着を借て寐る  
偽せめてゆるす精進

申の時斗より雷霆電降雲龍空を過る時電降大なるはからもゝのことし小きは柴栗のことし。

廿六日

芽出しより二葉に茂る柿の實	丈	艸
島の塵にかゝる卵のはな	芭	蕉
蝸牛頼母しけなき角振て	去	來
人のくむうち釣瓶待なり	丈	艸
有明に三度飛脚の行やらん	乙	州

廿七日

人不來終日得閑。

廿八日

夢に杜國が事を云出して涕泣して覺る、心氣相交る時は夢をなす、陰盡て火をゆめみ、陽衰て水を夢見る、飛鳥髪を合時は飛鳥をゆめ見、帯を敷寐にする時は蛇を夢見ると云り。睡枕有て槐安國莊周か蝶夢皆其理有て妙をつくさす。我夢は聖人君子の夢にあらず、終日妄想散亂の氣夜陰夢又しかり、誠に此ことを夢見るこそ所謂念夢なれ。我に志ふかく伊陽舊里迄したひ來りて夜は床を同じくし、起臥行脚の勞を助て百日か釋影のことく伴ふ片時も離れず、ある時はたはふれ、或時は悲しみ、吾心裏に染て忘るゝ事なければ成へし、覺て又袂をしぼる。

廿九日

暮に至て文音奥州高館の詩を見る、

高館聳天星似冑衣川通海月如弓

其地風景聊以不叶古人不至其地時



以不叶其景。

晦日

朔日

江州平田明照寺李由被問。

尙白千那消息有。

竹の子や喰残されし後の露

李 由

此ころの肌着身につく卯月哉

尙 白

還 岐

またれつる五月もちかし聶粽

同

二日

曾良來りて芳野の花を尋、熊野に詣侍るよし。

武江舊友門人の話彼是取まかせて談す。

熊野路や分つゝ入は夏の海

大峰や芳野の奥を花の果

夕陽にかゝりて大井川船を浮へて嵐山にそふて戸難瀬を登る、雨降出て暮に及て歸る。

三日

昨夜の雨降つゝ事終日終夜止ず、尙其武江の事共問談、既夜明る。

四日

宵に寐さりける草臥に終日臥す、晝より雨降やむ。

明日は落柿舎を出んにと、名残をしかりければ、奥口の間くを見廻りて。

五月雨や色紙へさたる壁の跡

\* \* \* \* \*

幻住庵記 (猿蓑集卷之六)

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流をわたりて、翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮たゞせ玉ふ、神體は彌陀の

尊像とかや、唯一の家には甚だ忌なる事を兩部光を和らげ、利益の塵を同らし玉ふもまたたふとし。日頃は人の詣さりければいと、神さび物しづかなる傍に住捨し草の戸あり、よもき根笹軒をかこみ、屋根もあり、壁落て狐狸ふしとを得たり、幻住庵といふ。あるしの僧何がしは勇士菅沼氏、曲水子の伯父になん侍りしを、今は八とせ計むかしになりて、まさに幻住老人の名をのみ残せり。予又市中を去ること十年はかりにして五十年や、近き身は簑虫のみのを失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟のあつき日に面をこがし、高すなこあゆみくるしき北海のあらいにさびすを破りて、今とし湖水の波を漂ひ、鴉の浮巢の流とどまるべき蘆の一本のかけたのもしく、軒端ふきあらため、垣根結添などして、卯月の初いとかりそめに入りし山の、やがて出しとさへおもひそみぬ。さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲のこり、山藤松にかゝりて時鳥しばく過るほど、宿かし鳥の便さへあるを、木つゝきのつゝくともいとほしなどそとるに興じて魂は呉楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭にたつ。山はひつぢ申にそはたち、人家よきほどに隔り、南薰峰よりおろし、北風海を浸し涼し。日枝の山比良の高根より幸崎の松は霞こめて、城有、橋あり、釣たるゝ舟あり、

笠とりに通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、笠とびかふ夕開の空に、水鶏のたゝく音、美景ものとしてたらずといふ事なし。中にも三上山は士寮の俤にかよひて武藏野のふるき栖も思ひ出られ、田上山に古人を數ふ。さゝほか嶽千丈か峰、袴腰といふ山あり、黒津の里はいとくろろ茂りて網代守るにそとよみけん万葉集の姿也けり、猶眺望くまなからんと後の峯に這のぼり、松の棚作藁の圓坐を敷て猿の腰掛と名く。彼海棠に巢をいとなひ主薄峰に庵を結へる王翁徐佺が徒にはあらず。唯睡辟山民と成て孱顔に足をなげ出し、空山に風を捫て坐す。たまくと心まめなる時は谷の清水を汲て自ら炊く、とくくの雫をわびて一爐の備いとかるし。はた昔住けん人のことに心高く住なしはへりてたくみおける物すきもなし。持佛一間を隔て夜のものささひへき處などいさゝかしつらへり、さるを筑紫高良山の僧正は加茂の甲斐何某の殿子にて、此たび洛にのぼりいまだかりけるを、ある人をして額を乞、いとやすくと筆をそめて幻住庵の三字をあくらる、頓て竹庵の紀念となしぬ。すべて山居といひ旅寝といひ、さる器たくはふべくもなし、木曾の檜笠、越の菅笠ばかり枕の上の柱にかけたり。ひるは稀々とふらふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里のを

のこ共入來りて、おのしゝの稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜坐靜に月を待ては影を伴ひ、燈を取ては罔兩に是非をこらす。かくいへばとてひたふるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとはあらず、やゝ病身人に倦て世をいとひし人に似たり。情年月のうつりこし拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛龕祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋にながる樂天は、五臟の神を破り、老杜は瘦たり、賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻のすみかならずやとおもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木もあり夏木立

### 十八樓記

美濃國ながら川にのぞみて水樓あり、主を加島氏といふ、稻葉山後に高く、亂山左右にか

さなりて、近からず遠からず。田中の寺は杉の一むらにかくれ、岸にそふ民家は竹のかこみのみどり深し、瀑布所々に引はへて右に渡し船浮ぶ、里人行かひしげく、漁村軒をならべて網を引、釣たるゝおのがさまくも只此樓をもてなすに似たり。暮がたき夏の日も忘るるばかり、入日の影も月にかはりて波にむすぼるゝ籐の影もやゝ近く、高欄のもとに鶴飼するなど、誠に目ざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八ツのながめ、西湖の十の境も涼風一味のうちに思ひためたり、もし此樓に名をいはんとならば十八樓ともいはまほしきなり。

此あたり目に見ゆるもの皆涼し

\* \* \* \* \*

### 伊賀國新大佛之記

伊賀國阿波の莊に新大佛といふ有、此所は南都東大寺の聖俊乗上人の舊跡也。ことし舊里に年をこえて、舊友宗七宗無ひとり二人さそひ物してかの地に至る、仁王門鐘樓の跡は枯

たる草の底にかくれて松物いはいこと問ひ礎ばかり董のみしてといひけんもかゝる氣色に似たらん。猶分入て蓮華臺獅子の座などはいまだ苔の跡を殘せり、御佛は後へなる岩窟にたゝまれて霜に朽苔に埋れてわづかに見へさせ給ふに、御くしばかりはいまだつゝがなく上人の御影を崇め置たる草堂の傍に安置したり。誠にこゝらの人の力を費したる上人の貴願いたづらになり侍することも悲しく、涙も落て語もなく、むなしき石臺にぬかづきて、  
丈六にかけろふ高し石の上

\* \* \* \* \*

紙衾之記

古き枕、古きふすまは貴妃がかたみより傳へて戀といひ哀傷とす。錦床の夜のしとねの上には鴛鴦をぬひ物にして、ふたつのつばさに後の世をかこつ、彼は其膚に近く其匂ひ残りといふまられんをや、戀の一物とせん、むへなりけらし。いてや此紙のふすまは戀にもあらず無常にもあらず、蟻の宮屋の蚤をいとひ、驛のはにふのいふせさを思ひて出羽の國最上

といふ所にて人つくり得させたる也、越路の浦々館野亭の枕の上には二千里の外の月をやどし、蓬もくらのしきねの下には、露にさむしろのさきりぎりすを聞て、晝は疊みて脊中に負ひ、三百餘里の險難をわたり、終に頭を白くして、みのゝ國大垣の府にいたる。猶も心のわひをつきて、貧者の情をやふる事なかれと、我をしたふものにうちくれぬ。

\* \* \* \* \*

洒落堂記

山は靜にして性をやしなひ、水はうこひて情をなくさむ。靜動二ツの間にしてすみかを得る者あり、濱田氏珍夕といへり。目に佳境をつくり、口に風雅を唱へて濁をすまして塵をあらうが故に洒落堂といふ、門に戒幡を掛て分別の門内に入る事をゆるさずと誓り、彼宗鑑が客にをしふるされ哥に一等くはへてをかし。且それ簡にして方丈なるもの二間、休紹二子の侘を次で、しかも其のりを見ず、木を植、石を並てかりのたはふれとなす。抑あもの、浦は勢多唐崎を左右の袖のごとくし、海を抱て三上山に向ふ、海は琵琶のかたちに似

たれば松のひびき波をしらふ。日えの山、比良の高根をなゝめに見て、音羽石山の肩のあたりになむ置り、長柄の花を髪にかざして鏡山は月をよそふ、淡粧濃抹の日々にかはれるがごとし、心匠の風雲も亦是に習ふ成べし。

七六

四方より花吹入てにほの海

\* \* \* \* \*

春 雨  
 頭 痛 ず と 妻 は 居 寐 たり 春 の 雨  
 春 雨 や 女 耶 は 部 屋 に 居 ぎ た な き  
 寐 た 人 を 起 す 聲 細 し 春 の 雨  
 春 雨 や 今 起 た か と 笑 は る  
 湯 屋 を 出 る 女 艶 な り 春 の 雨  
 吉 原 に ひ る 寂 と し て 春 の 雨

鶯 里

### 第三章 序 跋

#### 貝おほひ (三十番俳諧合) 序

小六ついたる竹の杖ふしく多き小歌にすかり、あるはやはり言葉のひとくせあるを種として、いひ捨られし句ともをあつめ、右と左にわかちてつれふしにうたはしめ、其かたはらにみつからは短き筆のしんきはらしに清濁高下をしろして三十番發句合をおもひ、太刀折紙の式作法もあるべけれど、我まゝ氣まゝにかきちらしたれば、世に披露せんとはあらず。名を貝おほひといふめるは、合せて勝負を見るものなればなり。又神樂の發句を巻軸に置ぬるは、歌に和らく神心といへば、小うたにも予が志す所の賊をてらし見玉ふらんことをあふきて、當所あまみつおほん神のみやしるのたふけくさとなしぬ。

\* \* \* \* \*

#### 曠野序

七七

尾陽蓬左楯木堂主人荷兮子、集を編て名をあらふといふ、何故に此名あることを知らず。予はるかにちもひやるに、ひとしせ此郷に旅寝せしをりく、の書捨をあつめて冬の日といふ、其日影續て春の日また世にかゝやかす。げにや衣更着やよひの空のけしき、柳櫻の錦をあらそひ、蝶鳥のおのかさまくなる風情につきて、いさゝか實をそこなふものもあればにや、いとゆふのいとかすかなる心のはしの有かなきかにたとりて、姫百合の名にしもつかず、雲雀の大空にはなれて無景のきはまりなき道芝のみちしるべせん、と此野の原の野寺とはなれるなるべし。

銀河序

北陸道に行脚して越後國出雲崎といふ所に泊る、彼佐渡か島は海の面十八里、滄波を隔て東西三十五里に横はり臥たり峻難谷の隈く迄流石に手にとる斗あさやかに見えわたさる。此島はこかね多く出てあまねく世の寶となれば限なき目出たき島にて侍るを大罪朝敵の類

ひ遠流せらるゝによりて只あそろしき名の聞ゆるも本意なき事に思ひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらんとする程に、日既に海に沈て月ほのくらく、銀河半天にかゝりて星きらく、と訝たるに、沖のかたより浪の音しばく運ひて魂けつるがごとく、膈ちされてそぞろにかなしひきたれば、草の枕も定らず、墨の袂何故とはなくてしほるばかりになん侍る。

續の松原跋

一柳軒の不卜のぬしは身を塵境にしたかひせまりて志は雲ある山の岩根をたどり、あるは吉野の花に笈を忍び、湖水の月に琵琶をうかへて風雅の奴となること年あり。是より先も集あらはすことふたゝびに及ぶといへども、春秋遠く雲行き雨ほどとして、東籬の菊も名をさまく、に、唐朝の牡丹も花しべをことにす。梅のわび櫻の奥も折にふれ時にたかへば、句もまた人を驚かしむ。猶其しげき林に入て花の香の清さにつき、色こき木の葉をひろひ

て左右に分ちて續て四節となす。判士四たりにこひて、我も其一にしたがふ。まことや樂にえらるゝものゝ、笛をぬすむに似たりといはん。されども青鸞の目をぬひ、鸚鵡の口を戸さゝんことあたはず。貞卯のとし、筆を江上の潮にそゞぎて、終に芭蕉雪夜の燈下に對す。

\* \* \* \* \*

### 虚栗集跋

栗とよふ一書其味四つあり。

李杜か心酒を嘗て寒山か法粥を嚼る、これに似て其句を見るに、はるかにしてさくに遠し。侘と風雅のその生にあらぬは西行の山家を尋て人の拾はぬ他栗也。

戀の情つくし得たり、ひかしは西施か振袖の顔黄金ハ鑄ニ小紫ヲ上陽人の圃の中には衣紵に葛のかゝるまで也。

下の品には眉こもり親そひの娘婆姑のたけき争ひをあつかふ寺の見、歌舞の若衆の情をも

捨す、白氏が歌を假字にやつして初心を救ふたよりならんとす、其語震動虚實をわかたず寶の鼎に句を煉て、龍の泉に文字を治ふ、是必他のたからにあらず、汝が寶にして後のぬす人を待て。

\* \* \* \* \*

### 伊勢紀行跋

根なし草の花もなく、寶もみのらず、たゞ賤しき口にいひのゝしれるたはふれことの世なるを、其角ひとせ都の空に旅寝せしころ、向井氏去來のぬしむつましきちぎりありて、酒のみ茶にかたる、折く甘き辛きしふき淡き心の水の淺きより深さを傳へて終に一擲して百川の味ひをしれるなるべし。今年の秋いもうとをめて伊勢に詣つ、白川の秋風よりかの濱荻の聲を聞てとまりくのあはれなることゝもかたはし書あらはして、我草の戸の案下におくる。一たび吟して感を起し、ふたたび誦して感をわする、三度よみてその無事なることを覺ゆ、此人やこの道に至れり盡せり。

西東あはれさあなし秋の風

箕虫跋

草の戸さしこめて物わびしき折しも、たま／＼みの虫の一句をいふ。我友素翁はなはたあはれかりて、詩を題し文をつらぬ。其詩や錦にぬひものにし、其文に玉をまろはすかをしつら／＼見れば雛暇のたくみあるに似たり、また黄奇蘇新あり、はしめに虞舜曾參の考をいへるは人にをしへをこれとや、終に玉むしたはふれは色をいさめんとならし、翁にあらずは誰か此虫の心をしらん。靜に見れば物みな自得すといへり、此人によりて此句をしる。むかしより筆をもてあそぶ人おほくは花にふけりて實をそこなひ、實をこのみて風流をわする、此文やはれ其花を愛すべし實なほくらひつべし。爰に何某朝湖と云あり、此事を傳聞てこれを畫てまことに丹精淡々しく精こまやかなり。心をと／＼むれば虫うこくかこく黄葉落るかとうたかふ、耳をたれて是をさけば、其むし聲をなして秋の風をよ／＼とさふし、猶閑盛に閑をえて兩士の幸にあつかること、みのむしのめいほくあるに似たり。

第四章 辭 詞 賦

芭蕉を移す辭

菊は東籬にさかえ、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非ありて世塵にけかさる、荷葉は平地にた／＼す、水清からざれば花さかす。いつれの年にや柄を此境に移す時芭蕉一もとを植ゆ、風土芭蕉の心にや叶ひけん。數株莖を備へ、其葉茂り重りて庭をせばめ、萱が軒端もかくるゝ斗なり、人呼て草庵の名とす。舊友門人ともに愛して芽をかき根をわかちて所々に送る事年々になん成ぬ。一とせみちのくの行脚思ひ立て芭蕉庵すてに破んとすれば、かれは籬の隣に地を替て、あたり近き人々に霜の覆ひ、風のかこひなと返す／＼頼み置て、はかなき筆のすさみにも書殘し、松はひとりになりぬべきにやと遠き旅ねのむねにた／＼まゝり、人々のわかれ、芭蕉のなこり、ひとかたならぬ侘しさも、終に三とせの春秋を過して、ふた／＼び芭蕉に泪をそ／＼く。今年五月の半、花たちはなの匂ひもさすがに遠からざれば、人／＼の契も昔にかはらず、猶此あたり得立さらて舊き庵もや／＼近う、三間の茅屋つぎつ



ぎしう杉の柱いと清げに削なし。竹の枝折戸安らかに、葭垣厚くしわたし、南に向ひ池にのそみて水樓となす。地は富士に對して柴門景を進てなゝめなり、浙江の潮三つまたの淀にたへて月を見る便よろしければ、初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ、名月のよそほひにとて先はせを、移す、其葉廣うして琴をまほふにたれり。或は半吹をれて鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ、たま／＼花咲ともはなやかならず、莖木けれども斧にあたらず、かの山中不伐の類木にたへて其性尊し。僧懷素は是に筆をはしらしめ、張橫渠は新葉を見て修學の力とせしとなり。予其二ツをとらず、只此陰に遊ひて風雨に破れやすきを愛するのみ。

はせを植てまつにくむ荻の二葉哉

\* \* \* \* \*

### 柴門辭

去年の秋、かりそめに面をあはせ、ことし五月の初、深切に別ををしむ。其わかれにのぞ

みて、一たび草扉をたゝいて終日閑談をなす。其器畫を好み風雅を愛す、予こゝろみにとふ事あり、畫は何の爲に好むや、風雅の爲に好むといへり。風雅は何の爲に愛するや、畫の爲に愛すといへり。其學ふ事二ツにして、用をなす事一也。まことや君子は多能を耻と云れば、品ふたつにして用一なる事感すべきにや、畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精神微に入り、筆端妙をふるふ、其幽遠なる處予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし、衆にさかひて用る所なし、只釋阿西行の詞のみ假初にいひちらされしあだなるたはれごとも、あはれなる處多し。後鳥羽上皇の書せ給ひし者にも、これらは歌に實有てしかもかなしびをそふるとのたまひ侍しとかや。されば此御ことばを力として、其ほそき一筋をたどり失ふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず、古人のもとめたる所をもとめよと、南山大師の筆の道にも見えたり、風雅も又是に同じといひて燈をかゝげて柴門の外におくりてわかるゝのみ。

元祿六孟夏末

風羅坊芭蕉述

あなしく五月六日の頃、旅たゝむと申つかはしけるにおとろき、例の次郎兵衛を使として後の旅は我も木曾路を経て眞一文字に五老井と志す。彦城の諸子にはやく對面せん事を常々にねかふ、かならず人に沙汰する事なかれとこまやかに文して色紙短冊繪讚の類もたせ給はる。猶離別の情あさからずとて發句などいとねんごろにしたゝめかさねて詞書をそへてむまのはなむけを寄られたり、并杉風子各餞別あり。

其 詞

木曾路を経て舊里にかへる人は森川許六といふ、古へより風雅に情ある人々は後に笈をかけ、草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふておのれが心をせめて物の實をしる事をよろこべり、今仕官おほやけの爲には長劔を腰にはさみ、乗かけの後に鎧をもたせ、歩行若黨の黒き羽織のもすそは風にひるかへしたるありさま、此人の本意にはあるべからず。

椎の花の心にも似よ木曾の旅  
うき人の旅にも習へ木曾の蠅

兩句一句に決定すべきよし申されけれど、今滅後の形見に二ツながらならん

侍ると云々。

\* \* \* \* \*

成秀か庭上の松をほめる詞

松あり、高さ九尺はかり下枝さし出るもの一丈餘、枝上だんをかさね其葉森々とこまやか也。風琴をあやとり、雨をよひ、波を起す、箏に似、笛に似、鼓に似て浪は瀬をとく。當時牡丹を愛する人奇出をあつめて他にほこり。菊を作れる人は小輪を咲せて人にあらそふ、柿柑類は其實を見て枝葉のかたちをいはず、唯松ひとり霜後に秀て四時常盤にして、しかも其けしきをわかつ。樂天曰、松よく舊氣を吐、故に千歳を經と、主人目をよろこばしめ、心を慰するのみにあらず、長生保養の氣齡を知てまつに契るなるべし。

元祿四年仲秋日

\* \* \* \* \*

僧專吟餞別之詞

杖頭に草鞋をかけて笠の内に名をあらはす、元祿六とせ彌生のはしめ、僧專吟武江の東深川の草扉を開て既に一步をはしむと書ぬ、此僧常に風情を好み、市を避て年々斗薨行脚の身となる。ことし又伊勢熊野に詣んとて、身は雲外の鶴にひとしく、流に哲をすゝき千尋の園に翅をふるふて、野に伏し雲に泊らん、胸中の塵いささよし。予春の交をなす事久し、今此別にのそみてともに岸上に立て箱根山はるかに見やる、彼白雲のたわめる所こそ旅愁の嶮難さかしさちまたなるべけれ、君かならず首をめぐらせて見よ、我又此岸上に立んといひて袂をわからぬ。

鶴の毛の黒き衣や花の雲

既望賦

望月の殘興猶やます、今宵は二三子にいさめられて船を堅田の浦にはす。其日もたそがれの程ならん、何某成秀といふ人の家の後に漕入れて、醉翁狂客の月にうかれて來れるあり

と船の中より聲々によはふ。あるじは思ひがけずおどろき悦ひて、簾をまき塵を拂ふに、其後園に芋あり、さしけ有て鯉鮒の切目たしぬにしもあらず。やがて岸上に榻をならべ、篋をのべてちのくいさよひの宴を催す、月は待ほどもなくさし出て、湖上はなやかに照渡れり。兼てさしぬ、仲秋望の日は月の浮見堂にさし向ふを鏡山といふなるよし、今宵猶其あたり遠からじと、かの堂上の欄干によれば、三上水壘は左右にわかれて、その間に十二峰のかげをひたす。かくいふほど月も三竿にして黒雲のうちにかくれたれば、いづれか鏡山といふことをわかず、されどあるじの興をそへて、をりく雲のかゝるこそと、客をもてなせる心ざし、いと切なり。やがて其月の雲をはなるほど水面に玉塔の影をくだきて、あらたに千體佛の光をそふ、誠やいさよひの空を世の中にかけてかたふく月のをしきのみかはとは、京極黃門の歎息の詞なるを、我はこよひしも此堂に遊びて二たび惠心僧都の衣をうるほす、無常觀想の便ならずやといふに、あるじは興に乗じて來れる客をなとさは興つきて歸さんやと、もとの岸上に盃をあぐれば、月は横川にかたふきて姑蘇城の鐘も聞ゆなるべし。

鎮あけて月さし入よ浮御堂  
やすくと出ていさよふ月の雲

\* \* \* \* \*

### 月見賦

今年の琵琶湖の月見んとて、暫く木曾寺に旅寝して繕所松本の人々を催に、乙州は酒をたづさへて泉川に三日の名をつたへ、正秀は茶を包て信樂に一夜の恋を覺す。今宵は茶といひ、酒といひ、かたふの人も二派にわかれて、酒堂は灯にかたふきて、其茶に玉川が歌を詠じ、丈艸は月にうそふきて、其酒に樂天が詩を吟ず、支考は若く、木節は老ぬ、智月は物の覺束なるかつきのあまのなま浮ひならず、それが中にも惟然法師は酒におとろき、茶に感じ、ほむるもそしるも空に風吹て、爰に二三者の志しをためさらんや、まして其外の友とする人も峨々洋々の心ざしをしれしは、凡て飲中八仙の遊びならん。誠やつれづの法師だに心をつくろはぬ友えらひはかゝる月見の侘なるやと思ひしまゝの草の庵に浮世の外

外の風狂をつくせり。

### 米くるゝ友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乗じて湖水の月に船を浮べんと、物このむ人の風情をそなへたるに、杖に瓢箪の唐子はなけれども、扇に茶瓶の若男あれば、赤壁の船のとほしさにはあらざめり。さゝ浪や打出の濱の名にしちふ鏡の山もこなたにさしむかひ、日枝は横川の杉につらなりて、比良の高根は雁をもあそへつべし、うしろに音羽の岸高く、石山の鐘はあはつの嵐にさへて、そこに楓橋の霜も置ぬらん、矢橋の歸帆は今宵をもてなすに似たるべし。

### 名月や湖水に浮ぶ七小町

されば、我朝の紫式部は石山に源氏の俤をうつし、唐國の蘇居士は西湖に越女のよそほひをたとふ、いづれも風雅の名に残りて、今のまぼろしに浮ばざらんや、實そも和漢の名蹤なりけらし。さて松本に船をさし寄て茶店の欄干に心をはなてば、目はよし蓬萊の水をへたて、身はたゞ芙蓉の露にうるほふ、竹の林の酒も時ならて松江の鱧は今宵なるをや、猶はたかたふく月の名残には、幸崎の松もひとりやたてる、古き都の名もゆかしければ尾花

川の明ぼのをこそと、千那尙白をちどろかしぬれば、夜ははや五更に過ぬべし。

三井寺の門たゝかばやけふの月

誠に推敲のむかしながら、船に今宵の遊を思へば、此座に韓愈の文章をもあさむき、賈島が詩賦をもとさぬべき詩人文客にとほしからねば、たとへ赤壁の前後といふとも、其地に此人をはつへきやと、見ぬもろこしを相手にとりて、今宵の風流に争ふほどに、月は長等山の木の間にいりぬ。

\* \* \* \* \*

鳥之賦

一鳥小大有て名を異にす、小を烏鵲といふ、大を鶡太といふ、此鳥反哺の孝を讀して鳥中の曾子に比す、或は人家に行人をつけ、天の川に翅をならべて二星の媒となれり。或ひは大年のやどりをしりて春風をさとり、巢をあらたむといへり、雪の曙の聲寒げに、夕は寐所に行なんと詩歌の才士も情あるに云なし、繪にもかゝれてかたちを愛す、只貪猶の中にい

ふ時はその徳大ひなり。又汝が罪をかそふる時は其徳小にして害又大いなり、就中かの嘴太は性佞強惡にして鶯の翅をあなどり、鷹の爪の利とを恐れず、肉は鴻雁の味もなく、聲は黄鳥の吟にも似ず、啼時は人不正の氣を抱てかならず凶事をひいて愁をむかふ。里にありては栗柿の梢をあらし、田野に有ては田畑を費す、精に辛苦の勞をしらすや。或は雀のかい子をつかみ、池の蛙をくらふ、人の戸をまち、牛馬の腸をむさぼりて、終にいかの爲に命をあやまり、鶉の眞似をしてあやまりを傳ふ。是みな汝むさぼること大にして其智を責さる誤りなり。汝がごときは心貪慾にして、かたちを墨に染たる、人に有て賣僧といふ、釋氏も是をにくみ、俗士も甚うとむ。嗚呼汝よくつゝしめ、羿が矢先にかゝつて三足の金鳥に罪せられんことを。

\* \* \* \* \*

俳體詩

春の月 篤里

落ちても見えぬ夕ひばり  
 遠く聞ゆるくれのかれ  
 つかれし足のなよくと  
 家路にかへるさとわらべ  
 をちこち匂ふ花の香に  
 かすめるかげは春の夜の月。

第五章 贊傳頌 誄

西行上人像讚

すてはてし、身はなきものと思へども、雪のふる日は、  
 さよふこそあれ「花のふる日は、うかれこそすれ。

\* \* \* \* \*

雲竹自畫像

洛の桑門雲竹自の像にやあらん、あなたの方に顔ふらむけたる法師を畫て、これに讚せよ  
 と申されければ、君は六十年あまり、予は既に五十にちかし、ともに夢中にして夢の形を  
 あらはず、是にくらぶるに寐言を以てす。

こちらむけ我も淋しき秋の暮

\* \* \* \* \*

卒都婆小町賛

あなたふとく、簀も尊し、笠も尊とし、いづれの人かかたりつたへ、いかなる人が寫し  
とどめて千歳はまぼろし、今爰に現す、其かたち、ある時はたましひも又爰にあらん、簀  
も尊し笠もたふとし。

たふとさや雪ふらぬ日も簀と笠

\* \* \* \* \*

杵折賛

此杵の折と名付るものは上つかたにてめてさせ玉ひ、目出たき扶桑の奇物となれり。汝い  
づれの山より生出て、何國の里の賤が礎のかたみ成ぞや。昔は横槌たり、今は花入と呼て  
貴人頭上の具に名を改といへり。人またかくのごとし、高に居て驕るべからず、ひくきに  
ありてうらむべからず、只世の中は横槌なるべし。

此槌のむかし椿か梅の木か

\* \* \* \* \*

東順傳

老人東順は榎氏にして、其祖父江州堅田の農士竹氏と稱す。榎氏といふものは晋子が母方  
によるものならじ、ことしも十歳ふたとせの秋の月をやめる枕の上に詠めて、花鳥の情  
露を悲しめる思ひかぎりの床のほとりまで神亂れず、終に更科の句を形見として大乘妙典  
の臺に隠る。若かりし時醫を學びて恒の産とし、本多何某の公より俸錢を得て釜魚飯塵の  
愁すくなし。されども世路をいとひて名聞の衣を破り、杖を折て業を捨、既六十年のはし  
め也。市店を山居にかへて樂む處筆をはなさず、机をさらぬ事十とせ餘り、其筆のすさみ  
車にこぼるゝがごとし、湖上に生れて東野に終りをとる是かならず大隱朝市の人なるべし。

入月の跡は机の四隅かな

\* \* \* \* \*

## 石臼頌

市中に有て俗塵によこれぬ物は、げに其はじめをよくするよりも、其終をとくる事はかたし。商山竹林の隱士も猶出てつかへ、寛平花山の上皇も終りたしかならず。たまたま是を見るに只石臼のひとつのみ、聖一國師は是をもて肉身を養ひ、法身をしる、民家には又麥刈初る比よりも粗こきおとす冬に至る迄、片時も餘所にする事なし。其高き事を論すれば役僂婆塞の庵の中にかくれて彼たくみを道引空きり上に立へし、上と下とふたつなるは力たらざる者の爲にもはらなればなり。不斷土間にあつて、筵より外を見ぬは、謙に居る事の調へるにあらずや、かりにも黄姉の手にとられざる事のありかたき事をふかくさぐりしるべし。目なたらかなる時は、かますを擔ふ、老翁の出來りてこつくとする音すみて、後は季札が劔を塚をかくることをはつべし。名をぬすむ盜人はあれと石臼をぬすむ盜人はなし、又人の心をみたさざるの至りならずや、月さしのぼる夕顔の陰にひとりはおとろの髪をまくな、ひとりは佛のまねをする天窓なりにてくるしき事を覺えず。挽まはすちからに其飢

をたすくるは、文王の始につかへ玉へるに事たかはすや。いまやうのむつかしき歌の節にもかまはず、聲の唱歌も古代のまゝにして、枝もさかゆる葉もしげるとしはぶさかちにわなゝかれたるぞをかしさや。

\* \* \* \* \*

## 嵐蘭詠

金華を鐔にして、あへてたゆまざるは士の志也、文質偏ならざるをもて君子のいさをとす。松倉嵐蘭は義を骨にして實を膺にし、老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間にあそばしむ、予とちなむ事十とせあまり九とせにや、此三とせばかり官を辭して岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ、稚子をほたしとして、いまだ世波にたゞよふ、されども、榮辱の間に居らず、日々風雲に座して今年仲の秋中の三日、由井金澤の波の枕に月をそふとて鎌倉に杖を曳、其かへるさより心地なやましうして、終に息絶えぬ。あなしき廿七日の夜の事にや、七十歳の母に先だち、七歳の稚子に思ひを残す、いまだをしむべき齡の五十年



にだにたらず、公の爲には腹おし切ても悔ましきうつはもの、はかなき秋風に吹しほれたる草の枕、いかに露けくも口をしくもあるべき、今はの時の心さへ去られて悲しきに、老母の恨、はらからのなげき、したしきかざりは聞傳へて偏に親族の別れにひとし。過つる睦月ばかりに稚子が手をとりにて、予が草庵に來り、かれに號を得さすべきよしを乞、王戎五歳の眼さしうるはしと、戎の一字を摘て嵐戎と名つく、其よろこべる色、今日のあたりをさらず。いける時のむつまじからぬをだになくてそ人はとしのばるゝ習、まして父のごとく、子のごとく、手の如く、足のごとく、年頃いひなれむつひたる俤の、愁の袂にむすぼれて枕もうきぬべきばかり也。筆をとりにておもひをのべむとすれば、才つたなく、いはんとすれば、胸ふさがりて、たゞおしまつきにかゝりて夕の雲にむかふのみ。

秋風に折てかなしき桑の杖

\* \* \* \* \*

## 第六章 説 辨 銘 箴

### 煤掃之説

明ほの空より物のはたくと聞るは壘を扣く音なるべし、けふは師走の十三日、煤掃のこどぶきなり。げにや雲井の儀式九重の町の作法は嘉例あることにして、只なみくの人の煤はく體こそいと面白けれ。ものゝく門さしこめて、奥のひとまを屏風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて嫗か帷子の上張、爪さき見へたる足袋もいとさむく、冬の日影のはやく、晝になりゆき、庭の隅、調度ともとりちらしたる中に持佛のうしろむきたるこそ目には立なれ、家童の椽の破れ、簀の子の下を覗き廻るは何を拾ふにやとあやし。味噌と呼ぶ大男の袋かぶり、簀着たるもめづらかに、米櫃のサン打つけ、俎板しらせ、行燈張かへてたつくり、鯨、あさ積のかをり花やかに、かみしもの膳するならべたるに、程なく暮て高軒とはなりぬ。

煤掃や暮行宿の高さびさ

## 閉關之説

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめにおくといへども、流石に捨がたき情のあやにくに哀なるかたぐいもあほかるべし。人しれぬくらふの山の梅の下ふしに、思ひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の關もるゝ人なくば、いかなるあやまちをか仕出でん。あまの子の浪の枕に袖しほれて、家をうり、身を失ふためしも多かれと、老の身の行末をむさぶり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには遙にまして罪ゆるしぬへく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事はわづかに二十餘年也、初めの老の來れる事、一夜の夢のごとし、五十年六十年のよはひかたふくよりあさましうくつをれて宵寐がちに朝起したる寐覺の分別、何事をかむさぶるおろかなるものは思ふ事多し、煩惱増長して一藝すくるゝものは是非の勝もの也、是をもて世のいとなみに當て貪欲の魔界に心を怒し、溝洫におほれて生かす事あたはずと、南華老仙の利害を破却し、老若をわすれて關にならん

こそ老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辨あり、出ては他の家業をさまたぐるもうし、尊敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖さんには友なきを友とし、貧きを富りとして、五十年の頑夫、自書みづから禁戒となす。

あさがほや晝は鎖おろす門の垣

\* \* \* \* \*

## 更科姨捨月之辨

あるひはしら、吹上とさくにうちさそはれて、ことし姨捨の月見ん事しきりなりければ、八月十一日、みの、岡をたち、道とほく、日敷すくなければ夜に出暮に草枕す、思ふにたがはずその夜さらしなの里にいたる。山は八幡といふ里より一里斗南に西南に横をりふして冷しう高くもあらず、かどくしき岩なども見えず、たゞ哀ふかき山のすがた也。なくさめかねつといひけんもことわりにしられて、そゝろに悲しきに、何故にか老たる人を捨たらんに、思ふにいと涙落をひければ、

係や姨ひとりなく月の友

\* \* \* \* \*

栖去之辨

こゝかして、うかれありきて、橋町と云所に冬籠りして、睦月ささらぎになりぬ、風雅もしや是までにして口をとぢむとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし。家を放下し、栖を去、腰にたゞ百錢をたくはへて柱杖一鉢に命を結ひなし得たる風情遂に菰をかふらんとは。

雲雀より空にやすらふ時かな

\* \* \* \* \*

座右銘

人の短をいふ事なかれ、己が長をとく事なかれ。

銘に曰

ものいへば唇寒し秋の風

\* \* \* \* \*

瓢之銘

一瓢重黛山

自咲稱箕山

莫慣首陽餓

道中飯顛山

顔公のかきほに生るかたみにもあらず、恵子かつたふ種にしもあらで、我にひとつのひさご有、是をたくみにつけて花入る器にせんとすれば、大にしてのりにあたらす、さゝえにつくりて酒をもらんとすれば、かたち見る所なし。ある人の曰、草庵のいみじき糧入つべきもの也と、まことに蓬の心あるかな、やがて用ひて隠士素翁に乞て、これが名をえさしむ、其ことは右に記す、其句皆山を以ておくらるゝが故に、四山とよぶ、中にも飯顛山は老杜が住る地にして、李白がたはふれの句あり、素翁李白にかはりて我貧をさよくせんと

す、かつひなしき時はちりの器となれ、得る時は一壺も千金をいだきて、黛山もかろしとせんことしかり。

物ひとつ瓢はかろきわが世哉

\* \* \* \* \*

### 机銘

閑なる時は臂をかけて嗒焉吹嘘の氣をやしなふ、閑なる時は書を紐とさて聖意賢才の精神をさくり、静なる時は筆を取りて羲素の方寸に入たくみなすおしまづき一物三用をたすく。高さ八寸、面二尺、兩脚にあめつちのふたつの封を彫にして潜龍牝馬の貞に習ふ、是をあけて一用とせんや、又二用とせんや。

\* \* \* \* \*

### 自得箴

もらふてくらひ、こふてくらひ、飢寒わつかにのがれて、

めでたき人の數にもいらん年の暮

\* \* \* \* \*

### 閑居箴

あら物くさの翁や、日頃は人の間來るもうるさく、人にもまみえじ、人をもまねかじと、あまた、び心にちかふなれど、月の夜、雪のあしたのみ、友のしたはるゝもわりなしや、物をもいはず、濁酒のみ心にとひ心にかたる、庵の戸押あけて雪をなかめ、又は盃をとりて筆をそめ、筆をすつ、あら物くるほしの翁や。

酒のめばいとと寐られぬ夜の雪

\* \* \* \* \*

俳體詩

夏の月

壺

里

やがてくれゆく夕立に  
 目には見えれど秋かよふ  
 夏やながるゝ山川の  
 ほとりに人の聲すなり  
 まひるのあつさ何つこへか  
 雲わけ出づる夏の夜の月。

第七章 雜種

須磨の浦

卯月の中頃、須磨の浦一見す、うしろの山は青葉にうるはしく、月はいまだあぼろにて、春の名残もあはれながら、只此浦のまことは秋をむねとする事にや、心にもものゝたらぬ氣色あれば、

月はあれど留守のやうな須磨の夏

\* \* \* \* \*

贈酒堂

湖水の磯を這出る田螺一疋、蘆間の蟹のはさみをあそべ、牛にも馬にも踏るゝ事なかれ。

難波津や田螺の蓋も冬籠

\* \* \* \* \*

贈風絃子

風絃は琴にあらず、瑟にあらず、彈に爪を用ひず、柱をたてず、天籟の禮を能く調へて角徵宮商の音にあらず。

\* \* \* \* \*

與或人文

大和國長尾の里といふ所は、さすがに都遠きにあらず、山里にして山里にあらず、心あるさまにて老たる母のおはしけるを、其家のかたへにしつらひ、庭前に木草のをかしげなるを栽置て、岩尾めづらかにすゑなし、手づから枝をため、石を撫ては蓬萊の島ともなしぬ。いく藥とりてんよと、老母につかへなぐさめなどせし實ありけり。家まつしくして孝をあらはすところ聞なれ、まつしからずして孝を盡す、古人もかたきことになんいひける。

冬しらぬ宿や扱する音あられ

\* \* \* \* \*

越後國能生宿白山權現社汐路之名鐘

むかしより能生社にふしぎの名鐘有、これを汐路の鐘といへり、いつの代より出来たる事をしらず、鐘の銘ありしかど、幾代の汐風に吹くされて見えざりしと常陸坊の追銘とかや。此鐘汐の満來らんとて、人さはらずして響こと一里四面、さる故に此浦は海士の見までも自然と汐の満干を知り侍りしに、明應の頃焼亡せり、されども、その殘銅をもて今の鐘能登國中居浦鑄物師某鑄返しけるとぞ、猶鐘につきたる古歌などありしといへども、誰あてこれを知る人なし。

曙や霧にうつまく鐘の聲

\* \* \* \* \*

蝶の翅

ある茶店の傍にやすらひしに、我を見しり侍るにや、内へ請して家女の料紙持出て曰、我は此家の遊女なりしを、今のあるじの妻となり侍る也、先のあるじも鶴といふ遊女を妻とす、その頃難波の宗因此所にわたり玉ふを見て句を願ひ請たると、例をかしき事を言出て類に望侍ればいなみかたくて、かの難波の老人が句に『葛の葉のおつるかうらみ夜の霜』と云句を前書にして、てふといひける女にあたふ。

関の香や蝶の翅にたきものす

\* \* \* \* \*

### 古池の蛙

それ天地は風雅なり、万象もまた風雅なり、此風雅は佛祖の肝膽なり、造化に隨て四時を友とす、見る所花にあらずといふ事なく、おもふ所月にあらずといふ事なし、心月にあらざれば禽獸に等しく、かたち花にあらざれば夷狄に類す、夷狄を出、禽獸をはなれて造化に歸れよ。

古池や蛙飛込む水の音

\* \* \* \* \*

### 吊初秋七日兩星

元祿六文月七日の夜風雲天にみち白浪銀河の岸をひたして烏鵲も橋杭をながし、一葉楓をふさをるけしき。二星も屋形をうしなふべし。今宵猶たゞに過さんも残り多し、一燈か、け添る折ふし遍照、小町が歌を吟ずる人あり、是によつて此二首を探て兩星の心をなぐさめむとす。

小町が歌

高水に星も旅寐や岩の上

芭蕉

遍照が歌

七夕にかさねはらとし絹合羽

杉風

醉登二階

酒<sup>シダ</sup>瀑<sup>キ</sup>布<sup>ル</sup>冷<sup>ル</sup>麥<sup>ナ</sup>落<sup>コ</sup> 九天<sup>コ</sup>

雪<sup>シ</sup>鈍<sup>チ</sup>左<sup>ミ</sup>勝<sup>ツ</sup> 六月<sup>ツキ</sup>鯛

重陽三句菊

風<sup>フ</sup>菊<sup>ク</sup>盞<sup>サン</sup>笠<sup>リツ</sup>冠<sup>クワン</sup>止<sup>セ</sup>

有<sup>ウ</sup>蘭<sup>ラン</sup>菊<sup>ク</sup>宜<sup>イ</sup>止<sup>セ</sup>

俳<sup>ハイ</sup>門<sup>モン</sup>有<sup>ウ</sup>芳<sup>フ</sup>菊<sup>ク</sup>

下<sup>カ</sup>同<sup>ドウ</sup>一<sup>イチ</sup>一<sup>イチ</sup>は<sup>ハ</sup>や<sup>ヤ</sup>こ<sup>コ</sup>な<sup>ナ</sup>た<sup>タ</sup>へ<sup>ヘ</sup>とい<sup>ト</sup>ふ<sup>フ</sup>露<sup>ロ</sup>の<sup>ノ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>く<sup>ク</sup>ら<sup>ラ</sup>の<sup>ノ</sup>宿<sup>ヤク</sup>は<sup>ハ</sup>う<sup>ウ</sup>れ<sup>レ</sup>た<sup>タ</sup>く<sup>ク</sup>とも<sup>モ</sup>。袖<sup>スベ</sup>を<sup>ヲ</sup>か<sup>カ</sup>た<sup>タ</sup>し<sup>シ</sup>き<sup>キ</sup>て<sup>テ</sup>御<sup>ミ</sup>と<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>あ<sup>ア</sup>れ<sup>レ</sup>や<sup>ヤ</sup>旅<sup>リョ</sup>人<sup>ニン</sup>

たび人と我名よばれんはつしぐれ

義を守る事唐からしにならへ

色を思ふ事温鈍のごとくせよ

鄙歌 自得

思ふこと、ふたつのけたる、其跡は、

花の都も、あなかなりけり

一一四

其 角  
芭 蕉

嵐 雪  
芭 蕉

翁 來  
去

題しらす

あみ雑喉を、升にはかりて、賣人は

買人よりも、あはれなりけり

中將實方之塚

中將實方の塚はみちのく名取郡笠嶋と云所にて、道より一里ばかり侍るといへど、雨しきりにふりて日もくれかゝれば。

奥州名取郡に入て中將實方の塚はいづくにやと尋ね侍れば、道より一里半ばかり左の方、笠島といふ所がありとをしふ、降つゝきたる五月雨いとわりなく打過るに。

笠島はいづこ五月のぬかり道

\* \* \* \* \*



須磨明石

まことに須磨明石の其さかひははひわたるほどいへりける、源氏のありさまもあもひや  
るにぞ、今はまぼろしの中に夢をかさねて、人の世の榮花もはかなしや。

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

\* \* \* \* \*

墓 参

甲戌の夏、大津に侍りしを、兄の許より消息せられければ、舊里に歸りて盆會をいとなむ  
とて、

家はみな杖に白髪の墓参り

\* \* \* \* \*

同行二人

みちのく一見の桑門同行二人、なすの篠原をたづねて、猶殺生石見んと急ぎ侍る程に、あ  
め降出ければ先此所に止まり候。

落くるやたかくの宿のほととぎす

風 羅 坊

木の間をのそく短夜のあめ

曾 良

元祿二年孟夏

\* \* \* \* \*

河原すゞみ

四條の河原すゞみとて、夕月夜のころより有明過る頃まで川中に床をならべて夜すがら酒  
のみ、物くひ遊ぶ、女は帯のむすびめいかめしく、男は羽織なかう着なして、法師老人共  
にまじはり、桶屋かぢやの弟子までいとま得顔にのしる、さすがにみやこのけしさなる

へし。

川風や薄かき着たる夕すゞみ

\* \* \* \* \*

### 雛の家

はるけき旅の空、ちもひやるにもいさゝかも心にさはらんもむづかしければ、日頃住ける  
庵を相しれる人に譲りて出ぬ、此人なん妻を具し、むすめ孫など持る人なりければ、

草の戸も住替代ぞ雛の家

\* \* \* \* \*

### きじの山吹

きじの山吹とよみけん、よしの川上こそ皆やま吹なれ、しかも一重に咲こぼれて、あは  
れに見え侍るぞをさなをさな櫻にもとるまじさや。

ほろくくと山吹ちるか瀧の音

\* \* \* \* \*

### 落馬

さやの船廻りしに有明の月入果て美濃近江路の山々雪降懸りて、いとをかしさにあそろ  
しく、鬘生たるものゝふの下部などいふものゝ、やゝもすれば船人をねめいかるぞ興失な  
う心地せらる。桑名より處く馬に乗て、杖つき坂引のぼるとて、荷鞍うちかへりて馬よ  
り落ぬ、便なき獨旅さへあるをまさなの乗手やと馬子にしかられながら、

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

といひけれども季の言葉なし、誰の句といはんもあしからじ。

\* \* \* \* \*

### あすならふ

翌は檜木とかや谷の老木のいへる事あり、きのふは夢と過て、明日はいまだ來らず、たゞ生前の梅のたのしみの外に、翌はくと言くらして、終に賢者の讖をうく。

さびしさや花のあたりのあすならふ

\* \* \* \* \*

伊勢詣

貞享五年さらざの末、伊勢に詣づ、我御白洲の土を踏こと既に五たびに及び侍りぬ、ひとつくしとのくはるにしたがひて、かしこくもかしこきおほん光りも思ひまされる心地して、かの西行の跡をしたい、増賀のまことを悲しひて、内外の御前にぬかつきながら袂をしぼるばかりになん侍る。

何の木の花とはしらす匂ひかな

はたかにはまた衣更着の嵐かな

\* \* \* \* \*

ふる郷

代々の賢き人々も、古郷はわすれがたきものにもほえ侍るよし。我今はしめの老も四とせ過て、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまたよはひかたふきて侍るも見捨がたくて、初冬の空のうちしぐるゝ頃より、雪を重ね、霜を経て、師走の末、伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせはと、慈愛のむかしも悲しくおもふ事のみあまた有て、

舊里や臍の緒に泣としの暮

\* \* \* \* \*

桃と櫻

草庵に桃櫻あり、門人に其角嵐雪あり。

兩の手に桃と櫻やくさのもち

### 笠造りの翁

草扉にひとり侘びて秋風さびしき折／＼竹取のたくみにならひ妙観が刀をかりて自から竹を割り、竹を削つて笠づくりの翁と名のる、心しづかならざれば日を経るに物う／＼、工みつたなければ夜をつくして成らず、晨に紙を重ね、夕にほして又かさね／＼澁といふものをもて色をさらし、ます／＼かたからんことを思ふ、二十日過るほどにや／＼出来にけれ、其形うらの方にまき入、外さまに吹かへりなど、荷葉のなかば開くるに似てなか／＼あかしき姿なり。さらばすみかねのいみじからんよりは、ゆがみながらに愛しつべし。西行法師の富士見笠か、東坡居士の雪見笠か、宮城野に供つれねば吳天の雪に杖を曳かん箆にさそひ、時雨にかたぶけ徐ろにめで、殊に興す、輿の中にして俄に感ずる事あり、再び宗祇の時雨ならでも、假のやどりに袂をうるほして自から笠のうちに書つけはべる。

世にふるは更に宗祇の時雨哉

\* \* \* \* \*

### 行脚の掟

- 一、一宿なすも、故なきに再宿すべからず、樹下石上に臥すともあたゝめたる鐘と思ふべし。
- 一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず、惣て物の命を取る事なかれ。
- 一、君父の讎ある處には、門外にも遊ぶべからず、俱に天をいたゞかざる忍びざる情あればなり。
- 一、衣類器財相應にすべし、過ぎたるはよからず、足らざるもしからず、程あるべし。
- 一、魚鳥獸の肉を好んで食ふべからず、美食珍味にふける人は、他事にふれやすき者なり、菜根を咬て、百事をなすべき語を思ふべし。
- 一、人の求めなきに、己か句を出すべからず、望をそむくもしからず、問はざるに説くは説くにあらず、問に答へざるはよろしからず。

- 一、たとひ嶮岨の境たりとも所勞の念を起すべからず、起らば中途より歸るべし。
- 一、馬、駕籠に乗る事なかれ、一枝の桔枝を己が瘦脚と思ふべし。
- 一、好て酒を飲むべからず、饗應により固辭しがたくとも、微醺にして止むべし、亂に及ばすの禁、有幽亂祀歳之戒、祭に酔を用るも、酔るを憎んでなり、酒に遠ざかるの訓あり、慎むべし事なり。
- 一、船賃、茶代を忘るべからず。
- 一、他の短ををけ己が長を顯す事なかれ、人を誘て己にほこるは甚だ賤き事なり。
- 一、俳談の外すべからず、雑話出てなば、居眠りして勞を養ふべし。
- 一、女性の俳友にしたしむべからず、師にも弟子にもいらぬ事なり、斯道に親交せば、人をもて傳ふべし。惣て男女の道は、嗣を立てるのみなり、流蕩すれば、心敦一ならず、俳道は主一無適にして成す而已を省るべし。
- 一、主ある者は、一枝一草たりとも取る可らず、山川江澤にも主あり、勤よや。
- 一、山川舊跡したしく尋ね入るべし、あらたに私の名をつくる事なかれ。

- 一、一字の師恩たりとも忘るゝ事なかれ、一句の理をだに解せず、人の師となる事なかれ、人に教るは己れを成して後の事なり。
- 一、一宿一飯の主も、ちろかに思ふべからず、さりとして媚び諂ふ事なかれ、如此の人は、世の奴なり、斯道に入る者は斯道の人に交るべし。
- 一、夕を思ひ、旦を思ふべし、且暮の行脚といふ事は、好まざる事なり。人に勞を懸る事なかれ、しばくすれば、疎んぜらるゝの言を思ふべし將た鹿食たりとも好むべからず。

〔鷺里云ふ、此行脚の控は、或は後世人（支考）の偽作ならん。〕

\* \* \* \* \*

### 五 諭

#### 逆の莖

凡て俳諧は前句を離れずして、而も離れくゝて離れぬやうに有べし、いかにも句かた氣高

く飾りたりとも、前句へ心通はずば不和なる夫婦の如く、家をとゝのふべからず。又いかに付たりとも、一句の様卑しければ詮なし、能くのきて心通たるこそめてたく覺ゆれ、是を譬へていはゞ蓮の莖を折て見るべし、切ば切れ易くして、而もその絲絶ゆる事なし、其如く打越を免がれ、前句の心をすつるは蓮の莖を折に異ならず、さて縁の詞心よく通はゞ寄合せの絲の續けるが如し。

五尺の菖蒲

句の仕立は五尺の菖蒲に水をかけたるが如く、又池水よりすか／＼と生出たがる如くに滯ることなく、丈け高く、口に觸らず、ゆらく仕立たらんぞめてたかるべし。

夜の柱

夜宿ると、なれぬ所に寝て、暗さに不圖夜起ては惑ふものなり、東西南北を能く見定め置て、其内目當の柱一本を覺え、それに縋り心を静めぬれば、東西は知らるゝ物なり。其如く前句の縋る所をよく考へ、吟じ返して其主たる所をもとめ出すべし。

乞食の蓑

乞食は蓑一つより持たぬものなり、貰ふものを何によらず是に收めて常に隠す、其入用の時、撰て用ゆ。俳諧の學問も是に同じく、あらゆる世事和漢のことわざをよく見聞おきて、そして用ゆべきにはあらねど、みな／＼蓑に入れて蓄ふべし。

人の顔

人の顔に七穴二眉をなはりし中に、みめのよしあし、顔の大小長短、色の黑白、目口のあいきやう、鼻の付やうとによる物なり。俳諧も是に異ならず、十七十四の文字數もかはらず寄せ合せの繰言とても同物なれ共、其うち手爾てなせ於葉のあとごきき、句のもやうによりて作るあり、上古よりいひふらしくることは珍らしからずとて據るもなきむだことぞいはゞ、横に鼻の付、豎に眼のあきくらむがごとし。

「これ偽作ならん？」

\* \* \* \* \*

貞徳宗鑑守武の畫像

三翁は風雅の天工をうけ得て、心匠を萬歳に傳ふ、此かげに遊んもの誰か俳意をあふかさ  
らひや。

月花のこれやまことのあるし達

\* \* \* \* \*

### 近江八景

辛崎夜雨

琵琶の湖雨よ疎顔か松の律

粟津晴嵐

さそ野分人の淡たつ市の聲

矢橋蹄帆

夕かすみ赤石の浦を帆のおもて

比良暮雪

さそへ雲白衣の天狗比良の雪

石山秋月

汐やかぬ須磨よ此湖秋の月

瀬多夕照

遅き日にかわかぬあみの左袖

壁田落雁

鳥の文かたゝの雁よ片便宜

三井晚鐘

盃に片われはなし花のかね

〔八景は宗房時代の吟なりといふ〕

\* \* \* \* \*

### 辭世

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

\* \* \* \* \*

俳體詩

秋の月

鶯里

野分の風の身にしみて  
人目かれゆく草むらも  
あはれもよほす虫の聲  
たがため憂きをかこつらん  
初かりがれの影見えて  
くまなくすめる秋の夜の月。

第八章 書簡

右飲酒一枚起請は尊朝先生御作のよし承候、もつともさる人の許に御眞筆にて掛物にして床にかゝり有之候、あまりく面白き御作ゆゑちよと寫し來り候。貴丈常に大酒をせられ候故此御文句を寫して大酒は無用に存じ候、仍て一句、

朝がほに我はめし喰ふ男哉

如何委しき事はやがて御目にかゝり万々可申述候。

十七日

はせを

其角丈

\* \* \* \* \*

當地ある人附句あり、此句江戸中聞人無御座候、予に聽評望み來り候へども、予も此附味難辨、依之御内意たのみ進じ候、貴丈御聞定之旨趣ひそかに御知らせ可被下候、東武にひ



るめて愚の手がらに仕度候。

其附句

蒜のまがきに鳶をながめて

といへる前句に

鳶のゐる花の賤屋とよみに鳥

二月上弦

は せ を

木因様

其返書

花牒拜見、或人の附句貴丈御聞定無之、依之愚評の義被仰越候、予猶考に落ち申さず残念ながら返進及び候、隨而下官さる頃在京の節古筆一枚相求、此節京中定むる人無御座候、依之貴丈に御内意頼み進じ候、いつの御宇の御撰集筆者等、貴丈御見定の旨趣ひそかに御知らせ可被下候、花落にひろめて愚か手がらに仕度候。

其古筆 菜園集卷七

春の俳諧歌

蒜のまがきに鳶のゐるをながめはべりて、

鳶のゐる花の賤屋の朝もよひ

木をわる斧のおとぞ聞ふる

二月下弦

木 因

はせを様

稱美の詞

「杭頼川の翁こそ予がおもふところにたがはず鳶の句の評感會寄に候、江戸衆に聞人なしとは聊いつはり、彼の翁が心はからんが爲に候、爰もとにも珍らしといふ人三分、同物に同物附たる古今類なきと云捨てたる人二分、道をないかしろにしていへるだけを云はる、など嘲る野蠻もまだく有りし、予が志を了察の士も、一兩人は有之候を、千里を隔て、

自慢云ひたらしたるは愚盲の到に御座候へども、日來彼翁此道知る人と定め置き候得ば、聊  
か了簡引見ん爲め書付遣はし候處、愚案一毫の違御座なく候、寔に淺からず候。』

は せ を

自讃の詞

『古往達人花に櫻を付けるに同意去りを本意と云へり、況して爲に爲を付けて一物別意を  
附分當時未來の作者に此句を似せさせず、古往今來未來一句の格いづれの時か秋風來つて  
芭蕉の露もろく被れんまでの一句一生これのみに存するばかりに候と書くうち鼻高くうご  
めき、肩のあたり羽ばたきするやにおぼえ候。』

\* \* \* \* \*

正秀に答る文

御芳翰辱染々拜見致候、御老母様御内御むすめ子御無事のよし、めて度奉存候、拙者持病  
暖氣にしたがひ、少づ、快氣候間可安御心候。

一乙州江戸立候に付、跡くの事御情に可被入旨、別方よりも申こし、鐵のたてをつきな  
らへ候、拙者も安堵よろこび難盡候。

一歌仙さてく感吟申候、かほとまで獨はたらき、大切の風雅驚入申候、則付墨致候、乍  
去、爰元も人にとり付候て、此返事の内も同名か茅屋ほこりの中へ大勢入込候而御趣も  
批判もしみくならず候、疎なる所々、御免可被成下候。

一同名方へ御手に被懸候清茶一袋、さかな一種被遣毎々忝御厚志難盡候、茶拙者賞翫致候。

一粟津草庵之事、先は御深切の至忝奉存候、兎角拙者浮雲無住の境界大畧故、如此漂泊い  
たし候間、其心に叶ひ候様に、御取持奉願候、心もこれにつなかれ心をうつし過さるや  
うの事ならば、いかやうとも御指圖可忝候、しばらく足のとどまる所は蜘蛛のあみの風  
の間と存候へば、足駄藏も藏ならず候、さすがの御人々申もくどく候へば打まかせ候。

一風雅此比盛に思召候よし、尤さこそと被存候、凡俗の人さへ、もてあそび候ものを、隨  
分御精御出し可被成候、乃肩老右之段御傳可被下候、一傳仕度候、何角取重候間、先々  
早筆申殘し候以上。

二月十九日

一三六

芭蕉

正秀雅丈

昌房探子兩子へ御心得可被下候、去歲中御心に被懸御懇情の段は、世上かましく候へば不申盡候、心底には難忘候以上

\* \* \* \* \*

近日芳野行脚存立候間金子二歩御かし可給候、おつ付貰ひ溜返濟可申候、されど我等事に候へば得なす間敷も候以上

はせを

去來様

\* \* \* \* \*

相傳醫術啓迪院一流秘書秘語那豈滿他乎、若於違背者、大小神祇別而生縁氏神可蒙御罰者也、仍而起請文如件。

貞享三年丙寅四月十二日

物部道意判

松尾芭蕉判

本間道悦様

\* \* \* \* \*

三月十七日伊賀上野と出て三十四日、道のほど百三十里、此内船十三日、駕籠四十里、歩行七十里、雨に遇ふ事十四日、

瀧の敷七ツ、瀧門、西河、蜻蛉、蟬、布留、布引、箕面。

古塚十三、兼好塚、歌塚、乙女塚、清盛石塔、忠度塚、敦盛塚、人麿塚、通盛塚、松風

村雨塚、越中前司盛俊塚、河原太郎兄弟塚、良將楠塚、能因法師塚。

峠六ツ、琴引、躰峠、くらがり峠、當麻呂岩や峠、小佛峠、檜尾峠。

坂七ツ、粧坂、西河上ちいか坂、うはか坂、宇野坂、かぶろ坂、不動坂、生田小野坂。

山峰六ツ、國見山、安禪嶽、高野山、てつかいヶ峰、勝尾寺山、金龍寺山。

一三七

此外橋の敷、川の敷、名もしらぬ山くはかきもらし候。

卯月廿五日

芭 万  
蕉 菊

惣七様

\* \* \* \* \*

御先に立候段、残念に可被思召候、如何様とも又右衛門便に被成、御年被寄御心静に御臨終可被成至爰申上事無御座候、市兵衛(雪芝)、治右衛門(苔蘇)殿、意専左(猿雖)、初不殘御心得奉願候、中にも十右衛門(半殘)殿、半左(士芳)殿、右の通りに候、母様およし力落し可申候以上。

十月十日

桃 青

松尾半左衛門様

新殿は殊に骨被折添く候

### 第九章 俳諧有耶無耶關

芭 蕉

昔花の本にをいて神代八雲の和歌を初め、代々大和歌の姿を調べ其風躰を分ちてより此俳躰は定めり、されど俳諧は餘の歌と替りて表に談笑の姿を顯し、裏に閑清の心を含る句法也、俳句は上手の虚を云ふがごとくに綴るといふを金言となして、虚は虚也、虚を實に綴るを是となし、實を虚に綴るを是とす、實を實といひ、虚を虚と顯はすは俳諧の道にあらず、正風は虚實の間に遊んで、しかも虚實に止らず、是我家の秘決也

一發句切字の事は十八字の品ありて、和歌にも連歌にも其沙汰あれど何故にと其故を秘すれば意さらに知れず、中古貫之誤りて言偏の俳諧の俳の字を綴り出すを人みな好事と覺えたり、しかれども勅詔を以て綴るの書なれば是を古實の例として共に俳の字に通用する事なり、他門に對して論ずべからず、爰を以て是を有也無也の關と名付け侍るものか、夫を捨て是を用る事、唯我門に遊ぶの人なり、他門に人騙言論の姿を知らず、口中に曲

を含事なかれ、心中に曲を捨る事勿れ、口曲は他門にして、心曲は正風也、能く守り能く用ひは、自他をのずから分るべし、自他分る所其言葉也、すむ是句切也

桃 青

### 十八體引手爾葉

挨拶切 いさゝらば雪見にころふ所まで

右挨拶は他に對するの一ツにして挨拶を天となし挨拶を地としていさゝらばは天なり、雪見にころふは地なり、すべて此類上下の言葉主客のへだてを以て一句の切とする是挨拶也。

中の切 猫の戀やむ時 閨の朧月

右猫の戀やむ時は空明なり、閨の朧月は立春後にして、物と物との七文字の中にて、心言葉ともに替るを中の切と云ふ也。

自他切 人に家を買はせて我は年忘

右自他は物々皆自他なりといへども、就中事隔りて人に我はと轉る所際立ちたる躰は自

他也。

無名切 咲亂す桃の中より 初櫻

右無は一句立所なく、何を切字とも用られずして吟聲に切あるを無名といふ、其心は咲亂すも咲終るなるべし、終ると五文字に置て座の句初櫻と綴るは理に落ち俳意薄かるべし、さるを亂すと心を隠して無名となれり。

玄妙切 春もや、氣色調ふ月と梅

右玄は玄也、妙にして心言葉と及ばず、詩に云、觀見庭前梅與松とかへして讀る心也、含る是玄妙也。

二字切 秋冷し手ことにむけや 瓜茄子

右現在未來の隔ありて、此二ツ尊ヶしからず、冷しは現在、むけやは下知にしていまだ至らず、此類二字切といふ。

三字切 子供らよ晝親さきぬ 瓜むかん

右子供等よは呼終て過去の下知なり、晝顔咲きぬは現在のぬなり、瓜むかんは催してい

また至らず、此時は過現未各心替て現在を切となし過未を粧といふ、惣て過去は切れず、一ツの未來は切に用ひる也。

二段切 櫻哉小町か姉の名はしらず

右櫻は小町と決定の二ツを哉なくしていへば花櫻小町か姉の名はしらずと心詞分るべし、是二段切也。

三段切 眼に青葉山郭公初鯉

梅若菜まり子の宿のとり汁

右目に耳に口といへる心を五文字に合て三段の切となれり。

に廻し 袖の花に昔を忍ぶ料理の間

右に廻しはもの、餘情の強く餘りて一句とまらず、冠へ戻るをにと押へてしかも其にの假名にてことを廣くもてなす、譬へば、桐の木に鶉鳴くなる扉の内といへる句同じ。

を廻し 青くてもあるべき物を唐からし

是此切は心に赤くと云へる餘情ををの字に合て、下の唐からし轉る所少なければども上へかへして切り侍る也、なに底心なければ切れず、殊に裾枯など云へる病句也。

大廻し 唐崎の松は花より臈にて

行春を近江の人とをしみける

右大廻しは天地未分の切にして初心の人知る事なし、口傳註にあかさず。

下知切 昔聞け秩父殿さへ角力とり

右下知は開け、云へ、取れ等の類頭立つ氣色にして切り、貴人高位の人に對して綴る事なかれ。

心切 秋風に折れて悲しき桑の枝

右心は物々に移るといへ共、秋風の冷しさに仙居の桑の枝我なくしてもろきかたち心詞分れてしかも睦しき、是心の切なり、此類多し。

句讀切 忘れすは小夜の中山にて涼め

右句讀は未來の物を現在に取越し、無き物に指南して吟聲尊しき假名にて轉る所を句讀

の切といふ。

押字 何の木の花ともしらず句ひ哉

右押字はのとの、袂に紛はしき切也、是は上にて押へ、下にてうき、一句切り。

抱字 夕顔や秋は色々の瓢かな

右此やは切也、しかし五文字の言路ふかひ無ふしてへすさるを秋はと抱へて一句分るべし、かなは浮也にて切れず。

重字切 奈良七重七堂伽藍八重櫻

右重字は島根に吉野によしの、と言葉重古代は重説の切ともいへり。  
右十八の切字を根として、此餘は色々に分れたり、猶口決。

發句豎横并狂句仕 様之事

縦句 五月雨を集めて早し最上川

傳云口中に曲を含事なかれ、心中に曲を捨る事なかれ、譬は、あなたうと八幡の森のほ

とくぎす

といふ句口中の曲也、ほとくぎすといへるは心中に曲有り、有句もあつめてと虚なし、自然に其志味顯る笑也、最上川と閑清也、曲流は一句の中にかくて表に顯はさず、五義備るもの也、豎の句は言葉分て吟味すべし、祝儀佳節、其外表立時皆縦をよしとす、縦の本歌を引、

まかなくに何を種とて萍の

波のうねくおひしげるらん

横句 煤掃や又此茶屋も不挨拶

傳云句躰作りの時は上の五文字に其句の題を顯はし、心持にて流を含み、序に曲の心を包篇にして押へ綴る也、譬は、

萍の何を種とてまかなくに

おひしげるらん波のうねく

如此五義篇序題曲流と全くつゝけてと云に限らず、顛倒しても常躰の句には句中に五義

を備へ侍るを第一とする也。

狂句躰 景清も花見の座には七兵衛

傳云題を七文字に置上下に箚流を備へ、箚に序を含み、題に曲を綴るを狂ひの句といふ、此類右備れる句のみにあらず、曲流序箚題とも綴る事は作者の器量によるべし、譬は、  
蒔なくに生ひしげるらん萍の

波のうねく何を種とて

### 姿情の事

發句 年の尾や頭の方は喰しまひ

年の尾や鮭の頭は喰しまひ

平句 錢をまくのを神も御機嫌

錢をまく手を神も御機嫌

右姿は即形なり、頭の方は喰しまひとは何を喰しまひたるか、其姿しれず、鮭の頭と姿

をあらはし、しかも句中に正月より極月迄の光陰終る意を含て餘情とはなるなり、すべ  
て姿情には死姿情風姿情の二つありて、同題を用るにも心得有るべき事也、平句の手と  
姿を求めたる右同し、先師二十年の功を積て初て鮭の頭を得たると也、猶年魚の口決あ  
り

傳曰、鮭を六年魚、鮎小年魚といふ、

### 虚實正事

虚 糸切て雲となりけり風巾

實 糸切て雲より落つる風巾

正 糸切て雲ともならず風巾

右虚實を非として正を是として此場を虚實の間に遊ぶといふ、句の正脈也、

### 不易流行之事



不易の句 古池や蛙 飛込む水の音  
流行の句 景清も花見の座には七兵衛

右不易流行の事は連俳ともにまゝ取ちがへ多し、古池は千載不易也、其姿述るに及ばず、晋子が頭へ山吹やと備へしからんかなと話せり、山吹古池心雲泥を隔つへし、山吹や蛙飛込む水の音とせは流行の句なり、流行は右の一句に准して此景清もよく心得あるべし。

發句五品の事

香 卯の花やくらさ柳の及びごし

傳云柳の句也、前に卯の花垣あり、伸びあがりて夏柳を見る姿にて、これ垣根に對する所香也。

寄 鹽鯛の齒莖も寒し魚の棚

傳云寒さの句也、古き魚の棚に賣残りたる鹽鯛の寒さといはねども、ちのつがら寒さ姿

の風情を寄る所、是寄也。

移 ことがくれて茶摘も聞や郭公

傳云愛すべき人こそあるに以下の茶つみ迄ほととぎすを聞との心は、四方に入渡りて聞人隔なき所を我に思ひすて、見る事、是移也、これは聞人に高下あればこそ。

響 蓬萊に聞はや伊勢の初便り

傳云年の初めのめてたきに又髭長き伊勢海老と顯はさんよりは上に蓬萊と置き、下に伊勢の初便りとつゝりて海老の姿玄妙に分明也、是響也。

志 埋火や涙の落ちて煮る音

傳云是は花咲老人の忌日に我翁の綴れる句也、其師の恩を感ずる時は少しき埋火にさし向ひて立去る事をも忘れ感涙炭火煮ゆる體埋火はうすく涙の煮る音は厚し、これを志の句體とす。

しかし火ありて煮るなれば埋火の句と心得べし。

右句作五品は姿入亂れて初心の人の見得かたき所、爰に註して能く脇に及はすべき

爲也、尤此外曲節作の三ありて節は節なれば、傘で押分け見たる柳哉

如此押分け見たるとのみあへて極の取扱見えず、しかし心中には繁れる景色あるべし曲作りは、名月や湖水に浮ふ七小町

此句體也、日月清々たるに對し、石山の邊りより堅田の浦の風流をも見盡さんとうかひ出、誠に船中盡のことなるゆえ、あらゆる人家の有様ともを七小町の變化といひまげたる也、心づくりとは上五文字の心をもて座の句に通はし、中七文字を作るなれば、象潟の雨や西施の合歡花

これらの類也、西施は古事なり、象潟の暮をいひ、彼が眠れる景色にも似たるらんが西施が眠りとは見留め、合歡の花は其他に有合せし者也、先は象潟は合歡の花の趣向にて、西施は句作也。

### 發句八躰之事

人も見ぬ春や鏡のうらの梅

幽玄體 やがて死ぬ氣色は見えず蟬の聲

古池 や蛙 飛 込む水の音

梅の木に猶やどり木や梅の花

有心體 猿引は猿の小袖をきぬたかな

金屏の松のふるびや冬こもり

くたびれて宿かる頃や藤の花

無心體 赤々と日はつれなくも秋の風

夏草やつは者共が夢の跡

梅が香にのつと日の出の山路哉

悠遠體 ほと、さす消行く方や島一つ

水無月や峯に雲ちく嵐山

風艶體

ひよろくと猶露けさや女郎花  
象潟の雨や西施が合歡の花  
粽結ふ片手にはさむひたひ髪

風情體

五月雨を集めて早し最上川  
いよくらば雪見にころふ所まで  
涼しさを我宿にしてねまるなり

寓言體

さのふをも峠といひし暑さかな  
道のへのむくげは馬に喰れけり  
秣負ふ人を枝折の夏野かな

ふり賣の雁あはれなり惠美須講

風曲體 景清も花見の座には七兵衛

青くてもあるべきものを蕃椒

右發句八體の事は自他の句體何々と見定めよく其趣向を改め脇に及ばすべきの鏡也、外に三十體などいふ事ありといへども、皆此八體を分つの末體なり、猶嵐山の發句に脇ふりの指南あり口傳。

奉納傳三品

正親句は言葉つゝきの縁をもて仕立る句法也、本歌の傳に同じ、

立わかれないなばの山の峯にちふる

まつとしきかば今かへりこん

俳諧 何の木の花ともしらず句ひかな

如此綴る事也、又響親句は五音十聲の通ひをもて綴る也、是も本歌の傳にひとし、  
聲すてふ葉山かくれのさを鹿も

ほのく見ゆるむさし野の原

俳諧

松風の句ふとつみや濱の宮

色あさやかに御手洗の蓮

むつかしき顔は家老に極りて

正響合體時は上五文字を普通に綴り下を連聲にも綴るなり、又上を連聲にして下を普通に仕立る事もあり、是は一句安からざる時の事と知るべし、譬ば、

裸にはまた二月の嵐かな

右三品は奉納法樂のみに限らず、祈禱夢想賀元服移徒此普通連聲なきを用ひず、尤も連聲は大音の格にして綴かたし、名人たりともよくく心を付くべし。

脇第三

時せよわらほす庭の友すゝめ

秋を込たるくねの指し杉

傳云發句縦の時は脇を横に仕立る也、脇は娘のごとし、一代親の懐を離れず、しかも其家を取る事なしといへる、是捨穂軒の教也、發句に顯れざる所を脇に顯はし、發句にたかはぬ様に仕立る也、尤も發句の同月の季を入れるべし、三月にわたるものは外に心得あるべき事、是は發句の友雀といふ、親により時求むる雀の居所を見付けてくねのさし杉と其場を顯はしたるものか、總て發句は其情十あるものを七ツ顯はし、餘れる三ツにて脇を調ふる事宜し。

一脇手爾葉留めの事は發句なり、けり、哉等の留めにもあらずしかと文字にて留めたる時の用也、模様也、其體三ツあり。

是ははね字留也、中にうたかひのや有べし。

三ツには合轉の脇此外二ツの留めは定の字留め通し員字の變化也、猶口傳あり、しかし常の卷には通用の字留めと心得一卷安からざる時は本式十百韻見合せ宗匠の計ふべき事也。

笠に受け袂に酔や桃の酒

柳も吹けば風もなびけば

又 夜風も小春の空に船心

かへり花咲場にやあるらん

又 齒ざしりを橋に聞夜や初時雨

時雨も軽き柳一本

第三振

友雀の脇に

月見んと汐引のほる船留めて

傳云第三は心軽く其詞重し、譬は他家の士のごとし、脇の下心をふみ一句長け高く轉るといふ、詩の轉の心と場と也、發句に心詞場所のもとらぬをよしとす、春秋は季あり、夏冬は雜なり、春秋三月に渡るものはよくく心得二月の發句に睦月の第三等を綴る事宜しからず、太郎月の發句に彌生の第三は轉じ様にて苦しからず、脇手爾葉留めの時は第

三を字留にする事もあり、本式十百韻に十體の格ありて一卷いひ捨の俳諧にも其例を引あへて留めに限る事にもあらず、左はいへ指合なきて留めの場をものすきに餘の留めを求る事なかれ、十體の格にも、もなし、らん留めとは哉返し句に留めけり留等は言葉わけて吟味すべし、なれや留めは五文字の下に抱へ字を置き、七文字にて押へ、其言葉を輕からざる様に仕立るべし字留めは外に口傳あり。

朧月

杜若

金衣鳥

郭公

かやらの景物にて留る也、これ五字一名といひ傳へてあはひに手爾葉のなきものを座の句とする也。

蝉もまた定らぬ鳴所

行船は心に蘆の隈もなし

鹿音は前の山より程近し

我家と思へは空の廣からん

挾箱持せず聲をふるふとは

分別の落る所は椿かな  
鳴からに響も鈴も松虫も  
放さるゝ鳥は小田刈頃なれや

右第三留め、てにはの事は數多にして一樣に定められず、あらかじめ手爾葉の取合抱押の  
むつかしき體は古式と新式の譯を記す、總て一句の面振發句にてつかふもの字を第三に  
はをといひ、をの字をもはと綴る事第一也、らん留めのや留めのいひ捨は古式に誤るの  
口傳あり。

唐崎の松に三種の譯ありて、發句第三平句の事分明也。

唐崎の松は花より朧にて  
からさきの松は春の夜朧にて  
辛崎の松を春の夜見渡して

### 附合八躰の事

前句 使のものを待せ置てや  
其人 奥様へ灸の隙を願ひ出て  
其場 板の間も鏡のごとく奇麗すぎ  
時分 暮るとも月夜はやすき渡舟  
時節 御流れの側に涼しきあやめ酒  
天象 一通り山から晴るゝ俄雨  
觀相 紀念とは思ひがけなきうき別れ  
係 宗盛の機嫌を熊野もはかり兼

時宜とは其座其時の時宜也、證句引かたし、此八體は悉く註にも及ばず句面にて分明な  
り、但し面影の事は七名にもいひ叶がたきものなり、實に無分別の場所の分別と心得能  
く古事の係を取合すべきにて。

### 附合八躰の七名

有心 参りにも船下向にも舟にして

となり婆々もこちて出来合

是を有心付といへる心は前句にいづれと其體なきは付にて姿を顯すしつらなる所の句體也、下七文字にて有心のこころを含めり。

柏子 上戸衆の密れは更るも知らぬやら

さらりくと手を打ちにけり

是を拍子といふ心は前句に嚙する所を付にて其姿を合せ嚙と姿と立ならび自然に自他を分る也、手を打ごとき品の拍子といふにあらず。

色立 赤坂の名も打からず紅葉して

知行寺 やらいかい白壁

是を色立といふは紅葉に白壁と色を取合せたる也、しかし此附合の姿はけやけき故しおとする事にあらず、百韻に一兩所と心得べし。

起情 雲雀も上る程の日なれば

春風に酔はせはせしと船に乗せ

是は起情也、此前句には情顯れず付句にて情を述る也、常船に酔人ながらも此長閑き空とさし所を極め、其姿を顯はして二句一意の句作とする也、是は一折に一所はくるしからず。

向付 使のものを待せ置てや

意見いふ時は言葉も改めて

是を向付といふは使に指向ひて前句より趣向を求出さす肌合陸敷連する體也、自他は本體各ありといへども、五句三句の渡りしたしき時はかくのごとくする事もあり、引句の外に委くいはゞ大名といふ句に老僧の付合するをも向付といふ月は其まで編む時の事也。

二應答 一代の料はないかや秋の暮

ほろりと落つる迷の實の音

是は應答といひ又會釋ともいふ也、應答は自問自答の心にして會釋は前句を釋する心也、二句一人の述る所にて詞は自他あり、是も打越のむつかしく渡り來る時の機變と知るべ

し。

遁句 幾年も箔のはげたる宮造り

口にかさりをいふは宿引

此付合の體遁る也、是は會釋の別名のごとくに誤る人あり、遁句は一所に別人有て前句にもたれず先つは遁句作りの趣向風雲寒暖の類より時節神祇の姿にて軽く付け放し次へ渡す故に尤手柄ある句也、會釋遁句はわかちかたきよし先師も風話あり、初心の是を作る事なかれ、其引句、

賀茂の社はよきやしるなり

### 附合八躰の轉句

一字流行 かけ合の窩に日和を定めかね

半分焼てやすむ田樂

いのはころは羽織のすそにされかゝり

やふの異名を捨る一服

意轉附 切れ賣の棒はいろく吹そらし

名こそ、の瀧といふはどこやら

二曲の附 何となく聲のとかりし歌かるた

無事てそだつた祖父もめでたい

小町の情はよこれてんけり

植込の中に瓦を取ちらし

柏子木聞てたばこ初める

尻に手を組む天下百性

右轉句の三段の付は前句の姿を見定め他の思ひ寄らざる所を付行事第一也、彼宗鑑の姿を見よやかきつばたと云ふ脇に、のまんとすれど夏の澤水といへるごとき口先の俳諧とて尙元祿の新式には甚いむ事也、七名は八體のつかひ方にして轉句は八體の轉句なれば自然にそらための句作あるとも下心には體廓にあたる所を辨へ句作すべき事也、第三聲



枯す山郭公飛くひて是は難なし、今時の付合多くは此第三の風情を以て轉句といふ也、小町と天下百姓の地曲風曲の俳諧には常並の附合にて、他の俳諧には轉句と意得べきもの也。

### 俳諧五花の口決

#### 花櫻の事

道みちや道にひろけて花櫻

右櫻は花也、花は櫻也、唐土大和の引合に牡丹はあなたの花とや、されば我鳥根の花にして花櫻といへるは花々櫻々といふ心なるべし、さるを花櫻と用る事本歌に深きありて一山一繩手など花を見渡したる時の事なり。

#### 附合一本櫻之事

糸櫻腹一はいに咲きにけり

右付合に一本櫻の事は細川法印より秘して花咲先生に口決し給ふ正傳ありといへども、

其後さらに用るものなし、門人去來、予が猿蓑の巻に末の花を略して彼傳を顯はす事あり、惣じて櫻一本の時には咲く開く、或は蒼むといふ字を置べき也、是正に立事習也。

#### 打越花之事

みよし野は常の雲さへ春の色

右附合花の定座の一二句前水仙、さゝん花、野の花、野梅等句ありて、花顯れたる時は定座の花にさはる故多く花前とて執筆の許さざる所也、しかし貴人高位の據なく句作出來すれば返句に及ぶ事あたはざる也、其時は證句のごとく綴て花脇にも春の句を付べし。月の名所花の事

更科や曇るといふは花の事

右月の名所にいたる人春は花などにて句作ある事多し、實に大事也、長頭丸の片帆傳にも悉く其場を辨へ花にて月を稱美する體にすべき事とぞ、更科は月の本名にして風雨のためには曇るべからず、彌生の花の霞より月の朧と變化して聊光りの薄き事もとなり、一卷に仕立る時は初表の月の座に正月あるべからず、夜の錦、かつら男、常我等のよそほ

ひを以て作り、裏の月にはくるしからず、花は發句體と月のためにいひ得る體にて、中の花ともに用捨なき事なり。

花に櫻付る事

唐崎の松は花より朧にて

山は櫻をしぼるはる雨

右花に櫻付る事前よそをひの花、花聲、花嫁、花かつを等ならは家櫻、山櫻の類をつけ友正花の時は櫻貝、櫻鯛、櫻人など、作する也、櫻に花も又同じ。

雑の花の事

かひらきの鮫は花より見事にて

行列といふものは何やら

右雑の花は秋移りなどにあるべき事也、歌仙に入句目より月秋を句作る時は十一句目の花春に及びがたし、去るは冬季をまたし故也、其卷には雑の句花を出し、花より三句去て素春とする事習也、雑の花とは異名也、又は花嫁、花聲も稱美のことばなれば、皆是

雑正花也、春と付行時はみたて花と云ふ。

○

俳諧月之傳

一月花は一卷の的にして尤も重し、其座の宗匠功者又は貴人等のする事なり、月は一表に一つの七月也、引あくる事仔細なし、百韻に一所はこぼす事をゆるせども極りたる事にあらず、秋裏の月は決してこぼすべからず。

一月花を一句に仕立る時は五分／＼に聞ゆる様にすべし、是は月の座を略して一所にするゆゑ也、甲乙ありては月花引題して宜しからず、さはいへ月に秋を結ぶといふにはあらず。

一月短句にてはそろへず、長句ばかりはくるしからず。

一秋の卷には脇第三までに必月あるべし、月なきを素秋とて室内の外には用る事をゆるさず。

一月前に據なく雨の句など出る時は待月、過たる月どもを拵用る事然るべし。

一打越に時刻ある句には月の座は晝夜の文字を用ゐる事なかれ。  
 一夏冬朝の月にはのゝ字を入るべし。  
 一月に戀を結び、名所を結びたる句は一卷に一所としるべし。

### 七夕傳の事

星合の發句に月を付る事の大事有、月は重く、星は輕けれども一夜の祝詞として幽に月の出る體など調置へし、譬ば、

星二つうつるや露のころび合

ゑにしばかりに盃の影

又 七夕は唐の湊も小盃

飛越す里も持たぬ桂男

### 月次の月の事

月並の月は輝り曇るの情もなく、さあれば定座等に用ゐる事かたし、作者功者にして其意を兼る時は下心にふまへ物などあるべき也。

青田の波も志賀の門先

六月は汗を一夜の最中とも

### 月に螢の事

一月に螢を結び、又は螢を付り、卷には兩様ともに光り稱美のものなるゆゑに螢をそだて月に押れざる様にすべし。

岩陰は螢に波のもへあがり

孫の機嫌の涼しさは月

### 名所前後の事

一月に更科、花に芳野と付行事なかれ、宇治に茶、龍田に紅葉と付け行事よろしきは其場

ありての景物なるゆゑなり。

### 本式表十句之章

一表十句は十百韻の大數にして、表に世のあらゆる事を嫌はず、但し神祇の發句に神祇の  
脇、釋教、述懐、戀等の發句も右に同じかるべし、常の發句には第三に神祇、月に戀、  
花に釋教等を時の宜に見合綴るべし、譬ば、

松杉にすくひあげたるみぞれかな

去

來

鐘面白う冴るたそがれ

許

六

ひたすらにねはる誓ひや丁子風呂

芭

蕉

長い羽織も四五年の内

曾

良

吹晴れてあとは躍の月丸く

千

那

橋まで押ししてのぼる初汐

橋

來

鬮網干す場を齋の離れかね

六

來

編笠組に入るは何ゆへ

蕉

神明の花に願ひをひらかせて

良

天高かれと地にも鼓草

那

右元祿新式室内有也無也の關は蕉門の人知る事あたはず、努めて三家の人たりとも無傳  
授のごとくして、これを俳諧する事なかれ、あなかしこ。

\* \* \* \* \*

刀うつ落に秋立つ鍛冶が家	露	里
門の田や稻の穂に出る今朝の秋	同	
萩の戸や明けなば散ん花の色	同	
朝霧や千曲を渡る三千崎	同	
白菊や葉にこそ霜の見てけり	同	

俳體詩

冬の月

篤里

尾花が袖も霜かれて  
 座の落葉にかぜさわぐ  
 友をや忍ぶ妻やとふ  
 涙に聲そぶ油干鳥  
 囀のうつみ火きえはてし  
 雲井にこぼる冬の夜の月

第拾章——芭蕉について

松尾芭蕉について由縁あることいも二三、及び傳記を掲ぐ。之れ淺學篤里の編むところ其遺漏を咎むるなかれ。

季吟の書

きのふ松尾氏桃青來りて予に改名を乞ふ、いなみがたく八雲抄のはいかい歌にならふて、はせをと呼侍ことしかり。

月花のむかしを忍ぶ芭蕉かな

\* \* \* \* \*

芭蕉庵再興の勸化文

〔前略〕廣くもとむるは其おもひやすからんとなり、甲をこのまず、乙を恥ること勿れ、各志のあるころに任すとしかりふ、之を清貧とせんや、將た狂貧とせんや、翁みづか

らいふ、唯だ貧なりと、貧のまた貧許子の貧それすら一瓢一軒のもとめあり、雨をどへ、風を防ぐそなへなくば、鳥にだも及ばず、誰か忍びざるの心なからむ、是れ草堂建立のより出る所也、

天和三年秋九月竊汲願主之旨濺筆於敗荷之下

山口素堂

\* \* \* \* \*

布施回向料

芭蕉永眠して、その埋葬の時、布施回向料は左の如し。

- 一直恐上人 金一兩
- 一御齊米料 金一兩
- 一御米湯料 金百疋
- 一御供養料 金一兩

一御弟子觀門子 金百疋

一三井寺常住院御弟子二人 金二百疋

家來衆三人 銀三兩

\* \* \* \* \*

引導の語

芭蕉を葬る引導は左の如し。

- 雪月魂魄、
- 風花精神、
- 等閑一句、
- 驚動人天、
- 嗚呼奇哉芭蕉、
- 妙哉芭蕉、

萬里白雲、  
一輪明月、  
五十一年、  
一字不。

\* \* \* \* \*

芭蕉の遺物

元祿七年十月十二日、芭蕉永眠せし時、世に残せし遺物は、即ち左の如し。

- 一出山佛一體
- 一鐵如意
- 一觀音經
- 一紙縷袈裟
- 一被風
- 一銅鉢
- 一木硯
- 一古今集序註
- 一百人一首
- 一新式

- 一奥の細道
- 一笠及簑
- 一杜子美詩集
- 一山家集
- 一杖及頭陀袋

- 外歌仙三卷
- 短冊二枚
- 松島象潟繪二枚

\* \* \* \* \*

俳門の六哲（俳諧六家）

- 山崎宗鑑
- 荒木田守武
- 松永貞徳
- 安藤貞室

西山宗因  
松尾芭蕉

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

俳諧の五派

談林風……………西山宗因  
 正風〔蕉風〕……………芭蕉庵桃青  
 江戸風……………寶晉齋其角  
 美濃風……………東花坊支考  
 伊勢風……………麥林舎乙由

〔此他山口素堂の葛飾風あり〕

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

蕉門十哲

板本其角〔寶晉齋〕此派を江戸座と云ふ。  
 服部嵐雪〔雪中庵〕此派を雪門と云ふ。  
 各務支考〔東花坊、西花坊〕此派を美濃派又獅子門と云ふ。  
 森川許六〔五老井〕  
 向井去來〔落柿舎〕  
 内藤丈草  
 志多野坡  
 佐分利越人〔越智〕  
 立花北枝  
 杉山杉風〔採茶庵、鯉屋〕

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*



### 芭蕉庵桃青傳

諸書に掲ぐるものを録せば即ち左の如し。

●歴代滑稽傳 (正徳五年、森川許六編)

一、芭蕉翁桃青は、伊賀の産、江戸に居して、俳諧に鳴る。桃青二十歌仙といふ俳諧をあらはす。

二十歌仙獨吟の内

船聲波をうつて腸氷る夜は涙

子をちもふ鯨の其聲かなし

第一第二の絃はじよさくとして午房を刻む

下女廟の花はもみよりも紅なり

前後名を出したる撰集は、二十歌仙一部なり。談林の時俳諧に長じ、日々向上にすり上げ、終に談林を見破り、はじめて正風體を見届、躬恒貫之の本情を探て始て、

道野邊の木槿は馬に喰れたり

と申されたり。天下擧て俳諧中興の開祖、正風の翁と稱し侍る。天下の門人數千人のうち、慥に正風の體を得たる者少し。初懐紙のころ、杉風、嵐園、其角、嵐雪、曾良等、江戸に在て隨仕す。

敵よせ來る村松の聲

有明の梨子打鳥帽子着たりけり

又

一輪ひらく芍薬の花

碁の工夫二日とぢたる目を明きて

其ころ故郷伊賀に、立歸ける道の記を、草枕とも野ざらしの紀行ともいふ。大津の千那、尙白、青亞三人師としたのむ。

辛崎の松は花より朧にて

此時の事なり。名古屋にて、野水、荷兮、いらこの杜國、冬の日俳諧を撰し、次の春春の日、打つゝき嘸野等のはいかいを勸む。風體、冬の日春の日は初懐紙にちかし、あら野は俳諧やはらかにして少かるし。

あらの  
さいくながら文字間に來る

いかめしき瓦庇ひさしの木薬屋

秘藏する子の瘦てかいなき

大垣如行、荊口等の門人、招まねて師とし頼む、野ざらしの紀行の時なり。其後おくの細道の時、大垣より伊勢遷宮おがみに別るゝとて、

蛤の二見へわかれ行秋ぞ

又江戸に歸て、諸門人に正風の體をすゝむ。又洛にのほつて、去來、史邦、凡兆等をすすめ、

初時雨猿も小篋をほしけ也

と吟じて、猿みのを起す。

猿みのに  
さまざまに品かはりたる戀をして

又 浮世の果は皆小町なり

又 火燈にのほれはくるゝ峯の寺

時鳥みな啼しまふたり

瘦骨のまだ起直る力なき

又 稻の葉延の力なき風

發心のはしめに越る鈴鹿山

膳所曲翠、正秀、珍碩等を引導て、ひさこのはいかいあり、大かた趣き猿蓑に等し。其後江戸に歸り、深川芭蕉庵をふたゝびむすぶ、許六此時にまみゆ。珍碩江戸に來て、深川集の俳諧を撰す。

乗かけの提灯しめす朝風

汐さしかゝる星川の橋

恐老が俳諧四五の後は、みなかやうに成と申されけり。支考桃隣は隨仕して、江戸に下り、桃隣は江戸に止り、支考は松島象鴻の旅に趣き、葛の松原を撰す。野坡利牛孤屋をそゝのかして、炭俵出來たり。

炭俵  
星さへ見えす二十八日

又 ひたなきは殊に軍の大事なり

又 舶買の七つはかりをあとつれて

又 塀に門ある五十石とり

又 幾月ぶりて越る逢坂

滅もせぬ鍛冶屋のみせの店ざらし

又江戸にて保生活圖をすゝめ續猿蓑を手傳して、伊賀に歸る。

附句 八九間空て雨ふる柳かな

聾が來てにつともせず物語

中國よりの狀の吉左右

朔日の日はどこへやら振舞はれ

又 ひとへ組織がうせて尋る

又 見て通る紀三井は花の咲かゝり

荷持ひとりにいとゝ永き日

こち風の又西になり北になり

わが手に脈を大事がらるゝ

杉風餞別に、別座敷と云俳諧あり。大概續猿に同じはいかいは淺き砂川の流るゝ如くに

せよとはいへり。

別座敷 五つがなれば歸る女房

此際も利上ケはかりにいひ延し

又 まんまとけさは輶を乗出す

又 國から來たる人に物いふ

急しう一白ついて供支度

蕪汲む匂ひ隣そふなり

大阪珍碩を助け、元祿七戌の十月十二日、痢疾をうれひ、つゝに難波の旅店にて遷化す。體は義仲寺に葬る。僧丈艸、惟然前號、尼智月は乙洲が母、園女は醫の一有が妻なり。猿

簀の比より随ひ、大阪之道後説洛に見ゆ。遷化の時、之道、舍羅、吞舟、心切に看病す。伊賀門人は故郷なれば其數多し。加賀の北枝は、おくの細道の時、金澤より山中の湯まで見送り、万子も早馬にて追かけ、實まことの道を盡せり。名古屋の露川は、東武下向の時、みやにてまみゆ。越中の浪化は、嵯峨の落柿舎にて參會あり。江東の李山も、落柿舎にて見え、東武下向の時、四梅盧に漂泊し給ふ。木導、汝村は方違かたぢがひして、つゝに逢はず。文通に、木導はかたの如くの作者なりと、度々稱美あり。路通、荷分、野水、越人、木因等は勘當の門人なり。其餘の門人は、一々にしるすにいとまあらず。俳諧の風體は、續猿蓑に終る。其趣相續して、年月の變化を察し、時代の費つひを省くものは、今江東彦根の俳諧に極る。其角が門人は、其角が手筋を残し、嵐雪が門葉は嵐雪が手筋を残す。如三燕尾支考は作あるものは、盡ると紛らかし、つゝに己れが作意は盡て、つれく讀と變ず。諸國の俳諧も、其所の宗匠の手筋となりて、桃青の血脉相續するものは稀なり。

◎俳家奇人談（竹窓玄々一遺稿、蓬廬青々纂訂、文化十三年秋）

松尾桃青案するに俗名甚七郎藤七郎忠右衛門等の或説あり今高野山報恩院の過去帳に從て忠左衛門と爲す

松尾忠左衛門は、伊賀上野藤堂何某の近臣なり。一年故ありて、故郷を立出て洛に上り、吟叟に遊學すること七年。寛文の末つかた東武に下り、礪川の水道修成備夫となつて、功を終るの比、薙髮して風羅坊といふ、深川に庵を結ぶ。門にみづから芭蕉を植て樂む、是より世に擧て芭蕉庵と稱す。伯船堂、無名庵、糞虫庵、風中庵の諸號あり。初の名を宗房といへり、後桃青と改む、又杖鏡子、是佛坊等の諸號あり。素より學識宏博、氣象飄逸古今に其人なき所以なり。且禪意を佛頂老師に悟り、書法を森川許六に得たり。當時その雅に歸依する人少しとせず。何れの年にか有けん、石山の奥に客居して、姑く幻住庵の幽閑を樂む。貞享四年の秋、鹿島の吟行あり、同く五年杜園を携て大和に遊び、元祿二年曾良を率て陸奥に旅す、同七年の秋は翁伊賀に在しが、浪花より招もあれば、奈良の重陽をかけて赴んとて、支考、惟然を伴ひ歩を進て風遊するの日、痢を患て大阪御堂前花屋仁左衛門が後園に伏す。病中の吟、旅にやんで夢は枯野をかけたまはる、是風詠の終なり。纔に七日を過て歿す。歳五十有一、嗚呼悲ひかな。此叟ひとたび江戸に襲擧してより、始て自然の妙を開き、遂に俳諧をして美を詩歌に競はしむ。光前人を蔽ひ、澤後代に垂る。其句正變一ならず、然るを後進察せず、其